

芭蕉翁句解大成

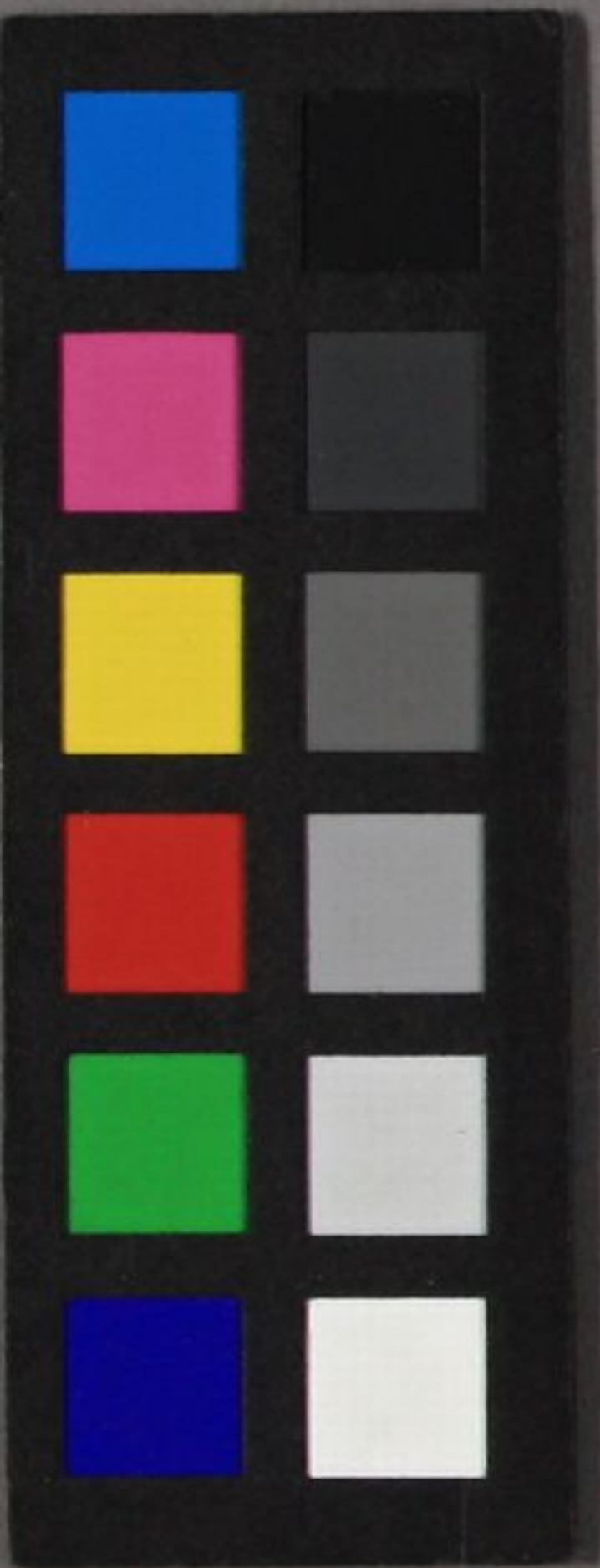
春

中村俊定文庫

文庫 18

829

1



月溪社何丸上人述

芭蕉翁句解大成

東都書林 尚古堂梓



書

歩 仙 跡 於 道 分 龍 似 鶴 光 未  
判 古 武 定 龍 走 路 乃 誰 仙 亦 有  
乞 也 然 之 皇 亦 乃 陰 一 人 亦 以 之  
曰 古 持 心 之 路 亦 意 心 之 心 亦 亦  
中 古  
芭 蕉 於 蘇 州 有 一 寺 曰 山 風

於 正 踏 之 乞 仙 跡 入 之 功 必 如 海  
之 亦 亦 於 大 道 既 以 佛 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦  
亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦 亦

今も我々もよく明る見え  
和字とて詠三信流は國人  
有院新乃先奥と重剛其二の  
修力を在り かの忠戸を引  
ひたさるるは向解参考は先年  
故て海舟可晴一対し 然る中  
山海は京末 唐法今爲然法急

入腹は舟も傳はしくたえ  
すもわらるる 別意は 志の力極  
と御りし 一はさるるをきりて  
政丙成の事も冬もたふく  
きりきりし かくし業を  
てん人よまおし生利合意  
か了取明海にありし事

此道好おるを再ひ起し  
時分身也と巻綴り言後才

小着拵拵後



凡例

- 一 古集より里来るといへども目あたらぬものとあつた免出は三聖に賛燧々城杜五郎門杜牧早行に類是たり
- 一 句に誤り来ふも右と同し表立す
- 一 新年古き家を描く見ると野村初名名をぬかぬのは是より
- 一 古住といへどもあつたぬを改補す野坡の影畧互顯支考々扇引さくは是ひ

是なり

一 亦三行句法もくホ句と心以句集と  
出以も青く既此足維脛長く山と  
みを蜜柑の毛此既是なり

一 余人此句をよむ祖翁の句と心以句  
此既敷しなり悉く青く

一 世上の此既も亦く遺稿或は勝  
笑に満る此既と今も現るあや  
とおもふも除く何事も又たもと思ふ

是なり一 出以ありて百三十年比今より  
至く此既見をほ治定しありて  
後人のふあよありて且於鄙よ云  
此既此もいふもいふもいふもいふも  
是に一言一句補ふなりて舊門よ

一 移入ふ此規摹なりて新なり  
一 豫くいふ祖翁の吟といへもあすから

に古事一 物語詩歌よ移入るも  
をいふと祿と必以古詩古歌なり

といふ事は白先おにり又  
 一白れ元来と来も信ふし解會  
 一白のさ美哉ささしむるさ  
 か〜彼さるも見む人れ用於  
 小あつさるも作み是を信用  
 せよといふさあさ免す

後俳何丸識

序五

古今俳書目次

一幅半	一代記	いつを昔	一字幽菜
今様	韻塞	市代巻	いさよひ集
入日記	初陣	白馬集	松原
芭蕉	初菰集	ふつふ	他諸書我
妻学日記	妻と秋	ささる妻	淡山集
まろ便	萩の松	何ら磨	花橋
美代白	栲耨	他諸集	坂東市
庭か	苔菜	舟納集	不白集
江戸合	篇実	系瓜菜	外産菜
泥足集	吾れ乃	砥波山	吐強齋

ちとる掛	茶花御職	乾梅子	翁くさ
芳凡流	巴く光	笈日記	翁傳
笈小文	忘水梅	柿字紙	漢金海邊
庶崎紀り	かき歌巻	貝 巻	かき水里
言々集法華	波 巻	猿 巻	伊達衣
常世芳	多胡碑集	袖巻	疏有後海
續猿蓑	そけ俳	其本山嵐	續別巻
其 便	袖日記	疏深川	続屈孫
燕守仙	總橋集	根奇子	武花曲
向水思	むし御	うふし川	うふ葉
後ろきり	卯辰集	宇多氏海	浮世水
賣花葉	後代猿	鶯鶯紀り	吃り録

百部六

後代離	勅進帖	白見骨	白綾別
首尾松系	弟此乃集	弟此乃紙	不乃極
ふと他り	傳表巻	若此巻	冬くち
小文序子	古今抄	本山巻	木乃花
二十番台合	八橋集	江戸通丁	江戸朝
江戸廣小話	江戸之吟	江戸地巻	株北日
あつし山	阿ふこ	有段海	東り紀
梅田三仙	阿ふ巻	三百額	さいつ
さいり記	難渡集	さいり巻	依叔中案
史料記り	葉々巻	京相三巻	本巻竹谷
京 曙	葉々巻	編浦巻	京竹巻
菊の巻	虚子巻	三乃有り記	部 曲



朝めくこ	云生山家	未来記	室棟枕枕
芝く春	書簡集	志代小摺	雛籠物語
十六篇	平代筆	雪代花	雪代花
夕歌歌	ひる棘の種	ひらね	一うはし
鄙懐紙	鄙言紙	元比	極益人
極白実	百将	物の親	消息集
其尾琴	墨吉物語	砂川集	まふ子儀

此外我伴寺翁塚集合せし七百七十余篇或は  
 法家の吟花ありしを世上勝負は吟等抄と  
 千二百四十余吟とす

附言

注釈成てのち爰より少くも一二年書おん  
 附て程度又書加へしは季長混乱して  
 見るよ物らくなりぬれは梅はうめ梅を  
 さくさくの追加の有るを丁付して何丁  
 目と目安を附早ぬ且て法言より  
 書おくりぬる句のうちを祖翁の  
 句よありぬも出来たりしをゆゑ宗房の  
 若衆との京都伏見の同及し祖翁と  
 四人あるを只宗房とありしを家との

宇記よ留置そむよりあれ一借一て皆  
 祖龜の初若こんほくをなりさるハ  
 條の宗房の勺ををけつり控て集中  
 勺ざりて可あもさけ訳なりこゑ一  
 さられハさ見くる一さハかひて見ゆじ  
 玉一こりふ軍を索引の序に記寸

庚寅季事

古稀翁何元

精校索引

春之部

菜旦	一ヨリハマテ	七十九	九十六	元日	八	初日出	八十四	
蓬菜	八七十九	年始	八	庭竈	九	惠方	八十	
万葉	九十七	年玉	九十四	若蛭子	九十四	子日	九下	
若菜	九下	廿一	枕	十	去立	十	去系	十一
福活	十一	柳	九十二	梅	十一ヨリ十九マテ	七十九	八十四	九下
猫之志	二十一	八十	白奥	二十二	鮎子	二十三	二葉	二十三
若中	三十一	八十四	氷消	二十四	八十三	九十四		
海苔	二十五	九十四	松ノ花	二十六	号	二十六	二十七	九十一
雨辰	二十八	九十四	正月	二十八	九十四	雑子	二十八	二十九

九十四 雲雀 二十九 三十一 八十一 椋 三十 八十三 八十四  
 芥 三十 七十八 九十 喜雨 三十一 三十一 八十  
 陽冬 三十一 三十三 初午 三十三 二月 三十四 水取 三十四  
 涅槃 三十四 貝老 三十五 接木 三十五 苴 三十六  
 老婦 三十六 喜歌 三十六 喜風 三十六 八十 九十八  
 燕 三十六 三十七 雀子 三十七 帰厚 三十七  
 螺 三十八 八十二 九十一 九十四 蛭 三十九 九十四  
 田螺 三十九 四十 帆 四十 柁 四十 里 八十一 九十五  
 籬 四十一 四十二 沙干 四十二 椋 四十二 四十八 四十八  
 七十四 九十五 九十八 九十九 花 四十八 四十九 六十八 八十三  
 八十四 九十九 九十五 九十九 百三 百四  
 稻茅 五十九 堇 六十八 六十九 八十一 鄭路 七十九 九十五

寒入 七十 山吹 七十 七十二 凍解 六十七 椋 七十一  
 喜 七十 永日 七十一 夜 七十二 九十九 百四  
 春日 八十 百四 落 八十 田打 八十  
 薊 八十一 荻 八十一 乳母 八十一  
 蒲公英 八十一 呼子 八十二 鳥 八十二 巢 八十三  
 杏 八十三 木芽 八十四 土 九十八 接 百四  
 臘月 百四 仍 七十三 八十一 九十  
 電風呂 七十八  
 梅 脈 号 落  
 竹 柴 百五

卷一

芭蕉翁句解参考

月院社印丸百

春の部

犬と猿と申すは申すの終園の年

愚考明暦三年の作すり申す園の酉をいふて  
犬と猿の申すは申すの終園の年  
希世作をすり申すは申すの終園の年  
東武五哲あり是も七傑のうち李吟翁の  
門に入らるる御徳を修りありとすり申す  
時表徳宗房と名のる歳十四支子年

一書云古今物の名此弁いさめは時すの

一書云古今物の名此弁いさめは時すの  
日古野めふ心とせ銭と人よ又えり

一説心とせ銭ハ松林葉と包むの心持ありとす

一庭訓述来流の文庫より明れ矣

一書云寺子の文庫より自本を名出すを

向とすり延宝中れ作たり

嵐雪の傍りあるる正月小袖を

云とすり

流やらの流めと似せりとは歌の矣

一書云流の平業平ふとの英殿哉かすりたる

と似せりふとすり

一書云白氏文集より唐の延陵妻々客を称英せし

詩ありく端正容貌若陽春とあるより出たる句  
く句の念ハ元且の暖氣を英一く人物の感  
此心一然風情又延陵妾の如く似る一特し  
て從禮一道の法法之樂天の詩ありく和音の  
解喻も記さる翁の句是の如く限る此  
追き不よりふましく志ありふたを彫りし  
ものあり

愚考是ハ孔門の子路り侍あり 說苑曰子路盛  
服而見孔子孔子曰由是襜々者何也今若衣  
服甚盛顔色充盈天下誰肯加若者哉子路  
走而出改服而入蓋自如也孔子曰由記之吾語  
若貴於言者華也奮於行者伐也句の意ハ

嵐雪の心うけて節衣を披く我も是せむとて  
つよし仕立おくア〜。哉免休る時を志を  
失ふさまとすらしつ〜。其用さるも本意ふを  
あ〜改されハ必ハ子路り侍り似る本心よる  
らすとあり子路ハ家多〜。て米を肩より  
老母に仕り才の是せ人のふき衣服をかさる  
る才ふも慈せんとあり我ハ心よ慈せんと  
い〜も嵐雪といふ是せ人ハあれハ必しも  
との意たり託宣す〜。又〜也慈恵の家よ  
く〜と

来ちのたふし一年を越して  
誰人ハ其如き居る人子乃其

一書小蒙求の孫晨なりとす

一書よと斤岡山の達磨と云推古天皇二十一年

十二月朔日聖徳太子斤岡山を過りし時又達磨飢

人とあり貌を擊腹襍糲して乃路に伏す眼を

冥光ありと云巖甚香し太子是を見たりと姓名

を問ひむる小豆を以て太子和歌を傳へて是を字

志ふるなり斤岡山の飯又飢くふせふ旅人あり

おやふしし飢人<sup>い</sup>か<sup>る</sup>ら<sup>や</sup>富<sup>れ</sup>小<sup>川</sup>の<sup>絶</sup>た<sup>り</sup>た<sup>り</sup>け<sup>り</sup>の

大恩の由名と志し

孝堂夜活圖書小曰ふ孝堂隱士此句を問ふ

孝堂云て云見ば此斤岡山の餓人の十二月に

大に對面あり一筆且もは種ふれは梅のえれを

食又ふつけて何となく思ひ書せし世に類なき

此のお説に此の説は養子も知すし秘す

つとといへとも初葉茂迷う凡の譯者の歌かし

さつとよして取らす之伝して敏す也

愚考孫晨の交々とたつて其果一把をもて蘇記の

具と及達磨の擊腹襍糲のつし此を「おやふし

何となく」も孫をば孫守孫晨と云達磨と云漢人

のといふかや屋を西の上人の撰集抄に曰

中江郡の内よに石の志と云てさすし安の

僧たり既面より始と云はるるかしてて年

毫満るあり肩全まきりのも孫の孫孫とあり

孫とあり人の名も入るおを乞ふて世を傳へたり

なむ心入のいふくよくて又心入遣ふ侍り脚の  
 木の枝まよもまの許一侍り侍り。業も侍  
 ら侍り。のそん人あつれをたれく命枝支。  
 程乃了すち侍り。この也或時人のちかよ入く  
 是美よとて帷子をたせせり。此信のり小根  
 極々心入に遣ふ。も有難く侍りか不便り  
 未まものハ人の隣ありてを何とて行時侍りま  
 たれハ便宜よく侍り時を是を終れ但未おハ  
 芝庭蕨を美あ社てた根のちれを肩よかけ侍り  
 是をいと親しく侍り。たれを正し。侍り。侍り  
 唯芝庭蕨をこの於す。小庭子時侍り。むろれを  
 けさせてあよへよとて正し。侍り。侍り。侍り。

えて押てとを侍り。たれく。小根侍り。とてま  
 ちおもかけ祿をちのつたつて止まらうと云々  
 さ社ち句の念をいのち。人の世を足かたら。かく侍り  
 歩けり。よよとよ人のまよ。ゆの。侍り。侍り  
 親美く。舟中。飲とあつ。め。侍り。もの。根。末。近。ま  
 新とやて。美あ。つ。ハ。必。定。は。人。乃。侍。あ。る。侍。り  
 たのし。ま。侍り。侍り。侍り。侍り。侍り。侍り。侍り。侍り。

伊勢の所。の。美。あ。つ。の。侍。り。ハ。七。部。大。後。入。く。侍。り  
 おめ。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り  
 五。并。句。あり。芭。蕉。概。青。室。れ。侍。り  
 句の。ま。よ。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り。侍。り



きたる深川の菴よりの冷たふふ庵

似合一や新年一瓢米又升

一書よ云深川芭蕉菴よ米又升たるのりか登る瓢

あり米又升れば門人より補ふとあり瓢の落ハ

一瓢重黛山 自笑称箕山 莫慣首陽餓

這中飯顆山

山口素堂

愚考此句の又文字真し川や年之やと

おせりありや忙子の五石の瓢は虚し

例明の又斗の米ハ實之又升入の瓢

よ似たりと奥一も顔子一簞食一瓢飲

やわの劣らむや

其引

顔子の恒粒よおつ形又もあは

恵子のつ了し粒ありあつて我

ひとりのひさこあり是をたく

つつけくふ入る器よせむとす

粒をたくしてのりよあはらん

つくつく酒をもらむときれも

又る知ちりあは人のいづく草麻の

いすしき糶入るさきもの也とよ

よもたのさしあるこのよやのて

ひく隠士孝子翁よこよはは

名をたさしむき大とをたふ

志る所よ句皆山をたてお

少一四山とよ中子も飯潁山を  
を杜のすめる地子一李白の  
たさうけの句ありまふ羽李白  
よかたうくふを法くせむと守  
かつむち一子時ハ一毒も千金をい  
子く飯山もかろ一とせむるあり  
も此とらふ瓢をかろ一我せか

愚考類ハ魏子之惠子一子一魏ハ庄子一曰  
惠子謂庄子曰魏王貽我大瓠之種我樹之成而實  
五石以盛水漿其堅不能自拳也剖之以為瓢則  
瓠落無所容非不呶然大也吾為其無用培之  
庄子曰夫子固拙於用大矣今子有五石之瓠何

不慮以為大樽而浮于江湖而憂其瓠落無所  
容則夫子猶有蓬之心也

四山一飯潁山ハ五嶽之一あり一さ四十八里余  
箕山ハ許由のかくさ一山あり

首陽山ハ伯夷叔無らあもて餓死せ一山ハ

飯潁山のりハ七部大鏡猿蓑の注よ委一りれハ  
略ハ 此句執あり一りも席のよ一りハ  
安よゆ皮

年一や猿よ忘せり一担の面

右注よ云ハ句表よ李とまも知ええれと一人  
のりひりれたる年一の潤年のた一めまあり  
すやとま

一書よ云此句仕換一の句へと許六同師の上り仕  
換一ありや公羽着て云毎句有仕換一ならむよ  
ゆへに一するのありむ下まら仕換一を好せん  
此時を一受て眼をひらき一と云

面白き歌のけしめぐ三の此花

愚考え日ち年の換月の始日始日始日を三えと  
夫を三つの心と賞一ありや

山や水よ春を新しき

旅の舞を蓬朶又舞負ふ西の年

愚考古より一清くや木丸皮にわれを  
ふのりて一ゆきゆきと流子そまの侍も

曲水亭

小町の敷のよくさる年一始

え日一田毎の日は替え一計

一書よ云此句法玉の折の後れ句と又へり

え日やおもへたさび一秋の書

二季合体の句ゆへ二季切なり

え日や何とあられと一様

愚考山家集より其よある様の枝を何となく

ふたふけれもむつり一すれ様の侍をすれ

牙様と虚よ候了る

まき葉にゆきや休装の初使

続猿蓑注解よ出れゆへ一

宵の年その名跡なり

おと旧友の来りて酒與一け  
ふふ元日れ直すて伏しとく喫  
又たつーりれハ

二日よもぬあつとせしれはの春

二日よもぬあつとせしれはの春

三日閉口歌四日

大津繪の筆れとて何佛

一書ふ大津の乙州の新宅よとて誠年の白く三日  
しるてのにはよとて何佛と居るは滑極感す  
ふとて四日のるは何佛と居るは滑極感す  
ふとて四日のるは何佛と居るは滑極感す  
ふとて四日のるは何佛と居るは滑極感す  
ふとて四日のるは何佛と居るは滑極感す

あつとせしれはの春

素茵と延喜六年日本紀竟宴和歌 得大鷲鶴

天皇 左大臣後二位兼左衛門大将藤原朝臣

時平 多賀度能見乃保利天美礼波妻女能

之多与母尔計不利豆伊万曾度美奴母乃

のよとくあるを新古今集賀正部は伝調

あゆるされとて國と先子を伝後しとて

たみ乃かるとしてふとてひとて和歌朗

詠集註刺史よとてよとて此る日本紀等

を却つれと仁徳天皇の四年二月は移し

此系更しく四方既見強ふに民つらき  
朝けゆふけのうま子たつたつて今分  
三年民を中以免官殿破る所と御理  
強ふるをもと免強へき所と七年強  
四月又横に強ふりて見強ふる百姓の  
柵にささるるをよ強ふむお強  
てよやうせたまふ所をさしその強  
ゆさせまふと古事記日本紀に見ゆ  
と仁徳天皇よ此御製あつる  
林居士諸鳥の紀記歌集に古事記仁徳天皇  
之九首日本紀仁徳天皇二十三首見ゆ  
此御製さし此強を時平公強詠さるる

一ハル九上

ゆくのさしり 廻る廻るを御製をばし書  
さし一敷意さし強ふとあり深行をゆ  
強つるあつるさつを時平公の強ふさ  
竈とらつてけ中ささし一ちさし水  
鏡よ仁徳天皇紀さしさみと云く或る  
強よ云かた強日本紀とつちさしと日本紀  
にさしとさか強さつと見合をさし  
御製あつる強さつゆくのさしり  
山たつたつたつたつたつたつたつたつ  
たつたつたつたつたつたつたつたつたつ  
後よさみたつたつたつたつたつたつたつ  
も新古今の御製と強さつたつたつたつたつ



一とせよ一度つまるくそ秋のま  
古注よ去今いおあよよあすよよのぬ白あ  
すくをーと物決ーあよとき  
愚考友系具風一たたるんたうけや常一とせ  
よ二よひとのふ来へま其かまの二精うて常  
をさすささあはとそ併ハ一年よ一  
くとたう

橙や伊勢能白子の店さし

蓬葉の臭よ愛のホアう干かすひもるるふ及  
れ一念たう

風麦亭

真立てやう九日の野山

愚心考荆楚歳時記曰一日鶯二日狗三日猪四日羊  
五日牛六日馬の日八日く六日さて六畜の日とい  
七日を人日八日と穀の日やう九日の事あれた  
山野れをいす、潤をんとなう

胎所へゆく人

椒の奈えさよ来よ洲田の桑

愚考埤雅曰獺取鯉於水齋四方陳之進而弗食也世  
謂之祭魚蓋自祭其先

木骨け悟者やまへぬく其の草

素丸の大全よ木骨のなすけとかまをつけ  
愚考木骨のなすけとい一糸皮へん木骨のシヤウ  
マてし我々をを扱いさかひもあはたさけ





かほちうとくひるをか  
おのこよねのかき向して  
らふとよきをきく

素園云一本は海子のある庭にてと斗り  
て一云出せると罪するを

梅ふしとく一立子此の醒々井

一書よ云小醒々井と江に醒々井の傍より  
浄苑を所加指しと出せしめたり梅を  
清くしと年立といふ所よををふく  
るり井のありて其まよきとてんゆる  
知事よ小醒々井とてん人たるかちり

秋風々々流の菴をるぬ

梅白しきのよや勢成造や社  
貞享二三井煉風をたつねてく

一書よ云就門の流ふとよき千載集  
一書よ云就門の流ふとよき千載集  
一書よ云就門の流ふとよき千載集  
一書よ云就門の流ふとよき千載集

一書よ林和靖の侍をとり玉へり

一書よ云筆談曰林逋隱居孤山常蓄兩鶴飛則  
飛入雲宵盤旋久復入菴中逋常泛小艇旋西  
湖諸寺有客至童子出應明延客同菴飛鶴良  
久連歸常以鶴飛為驗以取をふしへく洛の  
秋風成林和靖よちとくへたる因之く今日秋風

う庵にありて見れた梅も昔より居のさぬりよと  
なり此らも彼林連の歌ひよやあるもあまき  
勢の尺へぬらもーやさのよあさり落を望まれ  
ーやく奥せーたうー

梅咲きよろくふるのりー

貞享三年の吟句を略してのちり

むつきのす急流の中をま

ふよおちー真雨のそぶありて

いと心もやこふ水敷しの

み梅さかすちりりれた

み葉や尺ぬえつく歌をすれ

愚考は白のたー書をせんよ出せる書り

まにのくと溜つへー韓駒紅梅詩路入官家百歩  
香隔竿初識漢官粧直疑夢到昭陽殿一簇輕  
紅洗淡黄をとの侍も尺へ侍るさ斜を白梅は  
あさすのーをさすてハ強念なり

俚歌の或方よて

猿馬古葉と梅ー集り

一書よ寂蓮法師「おもひこるる古葉もたの  
むらむなれあるあまのふれ夕とま

山里も万歳おそー梅の花

梅折さう梅よまよま枝のま

は古久芳のちるるをさる梅の花

貞享四年の依り是年二月改え有え録

元年山里の句を

一書云吹徳院衣製山木との新端よつるかさ  
みまよふを香をも詠尺をやまむる筆の  
立入りし事通しゆくを時作の扱ひを  
妙なり次を

一書云曰空初撰をおて持し又その上よ木  
形て撰よ持あしたる之く後の句を

愚考阿古久君を貫之の童名を阿古久君とす  
貫之よりよへきを言名をむすひ玉ひしを  
伴質の古ゆふての吟なれを貫之初撰にて  
学問一都へ上りて朝氣の功いふしく後又位  
李隆既よ昇進しその後初撰へ傳てられ

一に初めの附植おしけし木此枝を人形へ  
く尺せられも貫之の末あはれ一人をいふは  
ら守古ゆを木枝むうし香よ句ひりる香も  
阿古久君の心を志す初をむかへ思ひまむ  
てかく吟して中年の昔を述懐の意なり

卓袋草

月待や梅かすけゆ小山伏

あふ山かみま

自清かむ香木へ梅の蓋が

え縁年中の伝なり尺同の通るよて別よ  
子細尺へ尺涼然評あて略す  
えたよきをうへ新なる地梅か

伊賀の山中に雲丹と云ふ  
も此ありて土産より堀出  
サ新と云ふ思ふより一  
ま香あり

香に白一や丹堀出の梅の心

北越片所の東よりエを切て不してサ新ニ寸越  
後の土も干せの土よりくかたるるすあ

梅咲くありて二人の店か那

門人伝へりみちをへる

をこるの館あり

亡るるをよと救れ中なる本あのみ

一書よ云新古今一がか免つるりよむいりに

あやめぬものよとこの梅よ心を忘るる

一書よ沈まよ又文字を忘るるをと記しあす

深川を移風取抄の真蹟又よととへ

新書たり一在せよ記しあれ

沈と一か

愚考りば白も古に伊賀みてえ縁え年の白

後令冥案よりして又眼の境を捉歴する

在々の事を忘るるふとや歸りまきとよ

あやめぬと書たりてやもとて

あやめぬの心是よてと一白字へは是れ

送別のを一書たり裸白にてと成能せ

るるとと沈の足ても鳴るのた

待兼より陣の梅を折りし

梓弓の歌

此梓の折と名付ふものも上  
つゝのたにめてさせし月出度  
枝葉の急物とす此は女いつ  
まの山よりせ出さる何木の  
れ跡の碇のかさみぬそや  
むらゝと横樾とす今も  
入と呼ぶも昔人堂上は異  
名を段といへり人すいかの  
かゝるに居て臨むるに  
低きよ有て願むへるは

世中と横樾

は樾のむの 樾の梅の木

細代民部の息よあよて

梅の木よたよやとり木や梅れ

七部大後よま

子供等よ梅おのこせ半の鞭

はよも教事の侍た

防川亭

香をさるる梅よかか入る朝露

家を女

暖戸の葵七のゆり水の梅

家女と侍衆の人国西惟仲の妻翁の門人

よて山の梅とち候一玉へ了

乙州梅別

梅差菜す了この宿のころけ汁

七部大鏡よ委一

其もやいふ久そのよ月と梅

かろく来ぬ屋をたの梅柳

娘の句と其音一刻價千金漸一日の月の字  
又いふむ方ちや一次の句は別論をよとく  
とて万葉よ梅柳すすくくをくふ候傑の  
うちよ起ひ一は候もとくろよの候しあ  
らむを

梅柳さてその流りな女子が

此の古調をいれも吹上出れ屋よを梅柳の序  
おのりしうれさ実よお守古詩五七言 碧州已  
満地柳与梅 辛春 謝公自有東山妓 金屏  
笑坐如化人 小色らよおもひ合せて真あり夫  
本よさそ美流せしと出せるも物成へ一は念  
ふ想よしる詩命の念よおのつかく叶よを風雅  
の清神てなり是等のの心を詩の念を一句し  
強らけ云信しれも吹上せりよてを云はるぬ  
やうに人ゆしてお美流が女かと梅を美流  
柳を娘おとよよよて詩の形容を持せしる  
あはれしる

人し又ぬ妻や鏡れうの梅

猿蓑住解子妻

はのうー新ハ方中、りりる  
一周忌父梅九、許一二年、  
妻のちぎく、うーうまきくぬ  
ちりまのじと、おしひやるさ  
のうまひ

梅、香ふむう、ぬ一字あをれん

一書よ六梅、の香をま、の免、りりるまふのふふ  
のやうに思ひ、うさくや、う人もちうくさうて  
昔とり、一字そまき、れ、ま妻、ぬも人、子、け、か、い、し  
悪者、そまき、位のる、ま、指、ま、及、ま、れ、ま、志、れ  
る、ま、へ、一、凡、此、句、よ、つ、ま、て、あ、ゆ、る、古、得、ま、

の梅、昔の意をたつ、ぬ、う梅、の香、上、昔とよみ  
ふけたる、ぬ、一、首、は、限、不、新、古、今、う、梅、の、香  
ふむ、う、を、ま、ま、妻、の、月、さ、く、ぬ、か、け、り、  
ぬ、ま、う、つ、ま、る、此、歌、を、ま、り、て、一、句、は、ま、法、は、る  
もの也、此、歌、ふ、あ、り、ん、て、は、句、を、解、さ、む、る、は  
兼、海、の、海、法、を、る、屋、

去来のもとへ亡人の妻なと

いひまら、ま、ま、

首尾弱のさ、り、ま、り、す、り、梅、の、さ

は、り、ま、り、二、美、の、洲、く、せ、あ、り、く、お、か、く、の、人、ら、首、尾、弱  
れ、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、梅、の、さ、ま、を、破、り、て  
妻、の、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、論、を、り

一書たりとも志しん亡人のてりやをいふれれ  
 凄しといふは即ち必定せよと美しき一書たりと  
 かしといふ方に利ありては此にげし書きて  
 大切く既よ其角う学すの才を運すは初書か  
 としといふを京ても表根よても才を運すは  
 とは初書の根よはんと書もく難し合へ  
 舟中も多たもあつたやむや此のうとく  
 緝蠻黄鳥止于丘隅と云々一書を添て見たり  
 難しと云々と云ふは一は一句の歌をうけりて  
 難しと云ふは一は句の全極たり  
 梅の香ふのつと日の出ふ山脈が  
 七部大漢よ委しりれたる暗ん

あちあちや面ししすやし柳枝

学。或魂よ移ふるを嬌柳

一書よ莊子并物論曰昔者莊周夢為胡蝶栩栩然  
 胡蝶也其の之よかよとる恒極の柳の賦るやめく糸  
 たりきる白日よ休老よふ於蝶の愛と云ふ  
 よふ屋きを学すと情しきるを彼故事よして  
 於事よつたをねたるといふ俗語の莊子なり  
 一書よ温叟詩説曰不比禁中人柳終朝刻得三  
 眠  
 一注して云漢苑有柳如人形号曰人柳一日  
 三起三眠丈夫集に「三」を起し外れ玉柳  
 ひるなく枝の仙を起くらむ又柳よ学すの云  
 と白氏文集よ云緑絲柔弱ふ勝鶯揚柳風花



别有情一日三眠 何大愧蘇家小女共知名 此詩よく  
叶へりともよも又事なをぬむと似たり 字を魂と  
したるも俳家の法はこ

愚考後撰集より「うく飛すの糸よよもて玉  
柳吹たふよ」を妻れ山風此方の意ありむら  
玉柳嬌柳いつても貴受たより玉を魂と持し  
たふやの柳とも依之く又古詩よ尊眠柳借全

糸の福よアおち半く柳のよ  
猿籠と對け

もろくのちろ柳よ仕すへ  
右々の門人ちられたまふ実の吳尺をり  
杜園をたく思

笠れ結し柳 縮る旅出かを  
送別し柳をわさくするまを和僕の例し  
よ之あはれこのちあり

ちこれのよさたる柳の志ふひぢ  
ちきこのの柳のささたる志をひぢ

柳のささたる、ささたる柳の論まちく之許六を  
ささたる柳とや陀伝師よ出んささたる柳とせよ  
と首切ふ旅とさ  
愚考もささたる柳よ組せむ

柳坊 歡喜の賛

ち柳の糸よむすよ 併の那  
傘よ押つけ尺事し 柳が

今は多くの人を傘でおしつけたりと似たり  
いくありき

八九百をて雨ふる柳の柳

ちり免ち炭俵も入次を続猿蓑も妻より  
し略し

猫乃意電の鼠はより通ひたり

田中

麦飯もやつし意の猫は妻

ちりめと延宝元年の次をえ縁の平和体  
ちり

猫は意やお付圍の脱月

浪化公云「おもす」あおあひはちあけ

ちりて圍れひるはへつ折なまうりるの歌  
猫の意も糖一たるちり

白魚一價あるしそりるを

延宝中の仇しりるを白作おさちり

薄しすし白魚もさるる海ぬき

貞享元年の吟しりていしりる風ふあり

親子は夢

白魚や星手眼をあく法は細

愚考も久甚事迹未洋たし如るし  
親子をすくしてお夕も死つ故ふ人より  
親子云我おしりも一休和上の意をくひて  
所あり一皆し一心し物ありしりて助るる

くのやきれも白魚も法の細くすくたれて  
 未束の眼をひくくへへ  
 愚考三韻多に山石既太歳禪師值會昌沙終  
 遂住鄂州湖邊以渡子接久兩岸各掛一板有  
 過渡者打板師乃棄掉迎之因僧辭入嶺師云  
 雪峯若向爾岩既近日如何但向伊在鄂陽湖  
 畔將三文錢買得撈波子每日撈蝦搥蜆過時  
 僧拳前話雪峯云窮鬼子得恁麼快活き  
 是美蜆子未尚ふやあむむ

この枕の麻飽てすくはの  
 くらたは後のふおさ  
 明はのや白魚志らり事一す

笈日記より又文字雪落しと出せり  
 ち再案な了と云  
 一説よ白魚ふきり千ヨットと訓む人も  
 ありそれち枕る魚かしれ有のまに  
 一ツスムと吟し可なりむあ

笛別

鮎れ子の白魚おくるつおれが  
 一書よ云葵の細乃を思ひまきる笛ふりて  
 方を白魚既老し比し人を鮎のまきり  
 たよふ時ふ年四十六え路二年のまき  
 李下芭蕉をおくふ  
 芭蕉植えり安みくむ秋の二葉が

此時深川の菴を芭蕉庵と号し天和年中  
中方なり

就尚舎にあり有職に  
人なりと云

おの名を先回し之秋のつゆまが

一書に云淮南子に入其国者從其俗入其家  
者避其諱一

一書に曲礼に云入竟而回禁入国而回俗

愚考がしく似てき急大まきと違へり有職の  
人とも廣く物を知る人なりと云に「物の名  
もそはるよしよア」かたうりり新語の芦  
も伊勢の傍秋を秋のおのあつるをよ

たるとそのアアアの名并吳名是より限る意が

す一ヶ名 玉の芋 十二ハ子よよかすたるよ

さく針子 沙字子 けされ子 今アア 芋

蘆 擇茨火 佳 葭 鳥藍 茨火 薩 萩 菰

笋名薩 等の書方あり又此段の文字の書方

蕪 兼 過 芳 葭花名蓬 蘆 等の久あり

葭 芋 限しおの名の取よアくかたうり文字

はかたうりたる吳名の一二をりふ杜鶴三百余

名 馬百八十余名 菊百七十余名 梅百五十余名

犬二百十余名 貉七十余名 蟬六十余名 芥子

猿 羊 牛 鼠 鳩 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

蛇 蜘蛛 百足 螢 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻

蟹 蜘蛛 百足 螢 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻 蟻

草木名 柳 梨 栗 桃 李 杜若 烏瓜  
 龍膽 蓬 荔枝 枣 葦 苔 參 薊 葵  
 栝 菘 芥 菜 豆 類 苜 蓿 行 松 篠 竹 荻 葦 芥 菜  
 甲 或 者 二 十 三 十 の 吳 名 あり 今 余 の 扱 ぶ 所  
 い ち ち あり 四 十 五 の 書 方 牧 養 する 人  
 い ち ち あり 以 予 々 季 寄 吳 名 故 録 を 見 て あり  
 り 心 存 一

甲列郡内と云ふ能て  
 斐ひあり山アも其の瀬川魚

茅舎れ画製  
 昔は木へ共葉やさしや彼は家  
 若くさや狼通し道たよしの野

千里の許して  
 海苔汁に在る陸更せりし清菱栝  
 おとろへや藁よ食ありし海苔の砂  
 書し云増賀上人の禪書一三つたさん也  
 そゝありりるをの彼くけの骨又ありし  
 けかよ此の海月を海苔の砂よ赤ん  
 事し 海に佛語の骨髄し一くはしき乃  
 一車 かりし  
 愚考三ツたさんしを藁よ食ありしを云  
 するし三つたさんしを老かすなりたるをいし  
 老 臍

語しては休其をてをの毫もせて  
 古語云山家集下庫さなるものをあはれむ  
 くのをいふとさむいれを蛤をけりてはるく  
 とすりるをゆきく「たをうくも蛤をさ  
 しく布は履たふ蛤よるる名もたうあま  
 本歌をあたうしせすあをうるもかきちうま  
 うかきも着履の二さゆ叶ふとりを先  
 師をせすも蛤をうむむよすとのりをうれ  
 乃中ま法ふ叶ふと一辰すり上てはるく  
 愚者新古今集不教中戒の歌ふ「わいつあ  
 けふの歌ふとむいさるせきくまもつかひ  
 了はるしをともめさすはと一辰すり上すも  
 兼くはるふとむむとをたつはる  
 してまを説了はる笑上すは夫智度論曰  
 諸善中不教生戒為第一

松のふはかぬふある。次はこのた  
 此句を巻取しして松の根の獨吟ありて我義仲寺  
 寺、施以中法淨もは獨吟吟しりやと合は  
 依ことりし可考

後堂橋木子あて

土の松松ふや木はさる後松  
 は白蝶をそ花の影に出るも非方と松の  
 白く味くはる

嘗て此様の葉をみよきと云ふは  
 古調の吟万葉に清輔体草紙に曰凡の人の  
 としむる葉をのとしよふまふと標の葉よとの凡の  
 上ノ果ありてをいふ事よと云ふは此の  
 葉のやと凡の人の凡へきを嘗の標は葉よの  
 死と云ふ事よと云ふは凡の凡の上  
 死せりよたなりてよをその肝要よくし心を  
 せえく味よハハ事よふ事よ

百歳の宅よ

嘗て此の葉よ  
 愚考秘藏抄よ「嘗の標は葉よみよ  
 自了ひーたなりと云ふ事よと云ふ

此介よし嘗ののまれば多し

胡蝶云核をかしきふたれいお能事と云ふは  
 られありたりと云ふ。標は枝よ何なり。嘗の花  
 の梅まても葉よと云ふ事よ  
 或人云うく此の葉よと云ふは枝よと云ふは  
 かしきを死してふれと云ふ事よ  
 愚考も此の葉よと云ふは枝よと云ふは  
 枝よと云ふ事よと云ふは枝よと云ふは  
 冷しと云ふ事よ

嘗や柳の葉よ

愚考劉禹錫之詩に嘗到垂楊不惜声  
 柳よと云ふ事よ和漢に通用する事よ

梅の香もよみかき。并ふはきし柳の啼是  
その本とさるる

うゝ比李命もちふ薫する祿の先

消息系よ云此句と目ころそ又のふよて内所いと  
ま

一書云おと許六と本守とうと比委を業しらる  
とまれ白よて人しよいひもふやう曲とかけ  
合を大夏にす巻しつらと六義といへとい  
能信よら篇序をすうと歌曲流と心好下  
まうと是よりちふ薫する曲さし祿の先を  
流より白まると時作と現れかけあをせと不  
了へし

李吟勸進

和歌此吟とふや出雲のハキを

奈良よて

妻さうまらや名もたる栗山の朝露

いゆり天和年中の作とく出雲ハキの  
和歌を思ひよせらるる流と貞亨の二季の白  
まて西風のたるとや

大目板や一棧引捨一

一書よ山門の流統一休祥暉よ何そ書てと  
新ひりまに紙を長くつこせり東坂本と  
引まくと巖山よと一筆し一の字を引  
まひしとまら



愚考り正殿とくくもねあふ心ほふあふ人正殿心  
さるともちくとしと為程のちくさるく心切なり  
あやちらるる既よ久しそふあふ心切なり  
又かき受すくして大空のふくくかやうを  
こね中へりお俗より朝やけやけの  
夜さうねくさくくも俗論候よやうまぬ  
因正月報り

をくこまきの正月さるや若葉の下  
正月も美濃とをいや全月  
ちり免る延宝の吟さう若葉の巻も大部  
さうおま上下ふつを趣向り玉ひり心  
婁石も吟かちり半ふまきすは

天和年中の吟

高野山にて

父母の志起りよ志一維子の心

七部大鏡より

地心よりよとさけす心一維子の声

一書よ地心維子をよむと志起りよか  
をよよほしよよつけさせて後かろを  
地心すよよくくをよて維子の吟  
と云

西の花雪中の松子やまの心

古伝よ西の花の吟つけたる中よ維子の  
吟入りよま長史よ味をよむと云

一 是は極むと云く

其も亦る如く南の利くとは

千浦人のホと云と也

南利のてを視を依れれ我々の浦

永き日を啜りたりと云と云たが

一 書よ云く「さく」所くと云山をのちく尾の

たあかしく「り」もあゝの色いのみ

愚考 似きも 似き方ののちく「や」をりおま

くま六百書 取人なる 取昭法 呼引く「ま」の

百さえつ「ま」を書いへりたよ「取」まり「

字」く「ら」むの「方」もあゝむ

系中 也 きの「ま」つ「ら」ん 呼まき

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

はく「ま」く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

一 書よ云く「ま」をたつてあゝれよおまゝ 嫌る人の

石川北親生の舎身山店子  
我つれに心をなごさ免むと  
さす芥子の飯煮させては川を  
おまゝこそ青泥坊を能  
芥子もあゝむこそ代り  
いと今市もよおほゆ  
我なるの落喃のちりけ芥子飯  
天和年中の吟と  
笠寺存綱

か作てしやしらぬ寤も妻の雨  
一書よ興分を巻取しして明海流のそ心山額  
西百年の今そ行よまゝとて

愚考今坐来此を「そ子孫」居たふふあり  
とどむらむもぬ定を神をぬまらうな  
この付もえゆ

赤坂の彦よて  
ふ憎さやかき親されし妻の雨  
一書よ雨を家の父母といへた妻のふあうみ  
一書かこちをみとる子の母は抱れし形  
みうつての吟たう

昔所寄清水  
妻雨の本下よつてふ草が  
たゝるまゝかや降の葉つてふを根の漏  
一書よ新古今「つれ」と妻のたゝめやみ

きば志のつらつら新の玉の侍よ  
喜雨や枕くつらあつきの  
にのまま主るとあつらなる氏なり  
も海本をす

たふふさ急や甚速をのせんその乃  
まふ雨や甚吹返ん 川 柝

愚考春雨くみ日雨く其句急の終きやす  
たつれしそ急を以て喜雨 五月雨とおのつ  
いしつらあつらに候へしと云ふされし志の  
又句ふ心をつけて思へし五月雨は終ふへし句  
急を一つもたつて秋の雨をすし格下の淋し  
を候するをこれと自覚と其雨は五月雨

いふはつめいのたふさ

枯サ之やすし海その一ニ寸

阿波の庄に新大佛とりし  
あつら此まをとも都末大寺  
の聖後業上人の旧跡をり旧友  
空ふ七字をたし一人二人をさ  
そひしものして彼れよいふ  
に門簾橋の跡を枯たるま  
の庭よかかきて松ものいふと  
同む礎たこり草のふして  
といひらむものふらりまふ  
いふらむたふ入る蓮華

序 獅子也たしとたしとて其の  
あしとて其の世に佛を志す  
へたる定窟より起れてその  
よ見へ作せりよ清くくしとて  
其いすいつのたすく上人の所  
を山堂とて之を草堂と  
かしたるに安置したる誠  
よあらし人のちのちを  
たる上人の所を起して  
坐することかたしとて  
後て其のたすくも  
其のたすくもたすく

夫六又陽也 一石也 上  
悪考後系坊源とて末孫空上人の徒なり  
仁安年中入宋して天台山より阿羅漢を拜し  
留於此後治承四年大寺又土朝延源  
山初して再建せしむ頼朝公奉行たり  
其後室よりかきしを  
入かふ日とて系起り名残也

塔山 猿岩

陽也の末孫より 紙衣也

室の八尋山にて

系起りしむすむす 猿の系  
悪考紙衣の宿を切ぬきたる陽也のぬけり

又之しるふたなり  
室の八幡と下野國中又流あり法を傳生  
て強し似しるすと法輝彰長の發流すまふえ  
すつたう一燒極し彼是ふまきての吟成へ  
陽也や柴の多みは昂り  
七部大鏡ふくこ

二月吉日是掃の刺整して

函門ふ入を賀す

初午又狐の刺一天忘らふ

夢想

柵けきりし二月中旬初か子

延寶七年の事一と我二月中旬敵は云  
古流の侍もあつた

二月堂通夜

あまやふもつたの傍の香の事

一書よ云此の事や氷の傍れとしてその部  
に入せしむる邪なり二月堂よ公著るとして  
書よかまよしん此の法を二月堂より七日  
の一日堂茶の石井よ若狭公遠敷大匠神  
よして親世よへ載り初よ水邊出る別現よけ  
て靈符を平ん是を二月堂の水よとて

仔細よ

神垣やおもひもかりん 涅槃縁  
一書よ云今葉集よ「神」のさのあゝとて  
と文大すしきおとみのかけぬるのまうま  
涅槃今や教自合する 殊教のま  
続猿の解よまう

二月十七日 神路山を了る進

ありの用を志し増賀

此信がう

裸よとやうに死すまのるが

一書よ曰此旨賀の信を悲むといふ。初書有  
以上人及心の思ひ深く伊勢太神まよまに就有  
てり名利を捨よとの亦現をるあつてまひか神

衣等と食とに服くきて赤裸よく下向

あひりると撰集抄に記されたり唯珍説もて

を名利たるとやまう二月の月がとて信を

まうとて此翁の深志すしとて

追考西行の事とせよ知れざるを記すよ及

た〜の増賀と橋桓平の子慈恵大阿の才よて

寛弘元年八月七日寂す

追考寶物集 日本大師明通記等よと増賀  
上人と書

久所八体此内

貝志の風のみまや和方の浦

天和年中の吟たを貝志の風と二月二十日

その後慈波の浦下より吹風をりみ天王の法  
華今より竜宮の魚鱗地より今より女身とな  
むは貝を拾ひて聖霊今より遠蒼かしく  
舟で太子れ其前より傳ふとあり二月十九日  
天王寺の公人六時堂の前より日私をとりし事を  
執りて伝言の浦へ出て扇<sup>カ</sup>君<sup>ヒ</sup>子をきて廿二日  
太子の聖霊今より曼珠沙華より貝を舟で舞  
巻の四隅より立て舞樂を巻尺とかりしその  
貝此形様のふし似ると云くは風伝言の浦を  
吹たふくましくして和身<sup>カ</sup>の浦へありしあれとよ  
ふなり

捨<sup>カ</sup>のふ<sup>カ</sup>聖<sup>カ</sup>れ<sup>カ</sup>接<sup>カ</sup>核<sup>カ</sup>や山<sup>カ</sup>屋<sup>カ</sup>巻

昔ついでと大かゝる女<sup>カ</sup>襖<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>濟

菩提山より

山なるかたより休つりよむを<sup>カ</sup>信

神<sup>カ</sup>儀<sup>カ</sup>より

去<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>夜<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>童<sup>カ</sup>人<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>堂<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>隅

愚考やと切てしとる平<sup>カ</sup>午<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>あ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>是<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>神  
祇<sup>カ</sup>教<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>傳<sup>カ</sup>より<sup>カ</sup>猿<sup>カ</sup>蓑<sup>カ</sup>子<sup>カ</sup>鹿<sup>カ</sup>角<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>松<sup>カ</sup>耶<sup>カ</sup>也<sup>カ</sup>  
鼻息白<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>し<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>換<sup>カ</sup>と<sup>カ</sup>目<sup>カ</sup>路<sup>カ</sup>な<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>る<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>を<sup>カ</sup>  
傳<sup>カ</sup>へ<sup>カ</sup>り<sup>カ</sup>て<sup>カ</sup>唯<sup>カ</sup>に<sup>カ</sup>其<sup>カ</sup>の<sup>カ</sup>や<sup>カ</sup>よ<sup>カ</sup>す<sup>カ</sup>もの<sup>カ</sup>お<sup>カ</sup>か<sup>カ</sup>り





をうよとして又其角を茶の水よ茶をよわくして  
可憐そのりよ一りして白毫のすくすく手を又く  
る

子持子とちりつるあをり茶の葉

茶葉のあはれつるよ葉うよて志のしきつるあ  
よく此の流えおのりくり取合せよへ

近世の時

西と福川友のや石の生よあま

悪考寛文十二年二十九支主人按吟子早世よ  
仕友を解してまてと改東武へ飯く時のあま  
け今うかん

吹度よ葉れ活あるれか南

貴葉やかくと又るりり葉れ売

と張すきや白たぬあまのよこや

葉子れ焚

君や葉あや葉子のあま

唐去の俳遊こころ心あま

愚考史記滑稽者傳曰於他滑稽也滑稽如字藝

音計也以言滑稽滑稽利其知斗疾出故滑稽者

葉れあまをころり中の日新

一本よ陣中の活あがとあやり葉れくよ中

あま通れ地あまのりあまのりあまのり

よ新れあかけあまのりあまのりあまのり

飯本亭

つれづれの羽の葉を度々よめる流の登松

記しし系友のこころをいめり流るる

愚考西上人の賦の花依れぬ愛人依る無情されば

六の葉を友よとてよめり流るる色母の死り

と流るる先年一葉とて友よとてよめり流るる

と柳の葉をよめる流るるの流るるよとてよめり流るる

うつされ流るるよとてよめり流るるや乞も又承友

よとてよめり流るるよとてよめり流るるよとてよめり

流るるよとてよめり流るるよとてよめり流るるよとて

流るるよとてよめり流るるよとてよめり流るるよとて

一書よとてよめり流るるよとてよめり流るるよとて

と化すものたるよとてよめり流るるよとてよめり流るる  
葉と化すものたるよとてよめり流るるよとてよめり流るる  
よとてよめり流るるよとてよめり流るるよとてよめり流るる

古池や 榎とてよめり流るるよとてよめり流るる

一書よ江戸川六間堀榎を友よとてよめり流るる

草よ荒らしてよめり流るる古池は感偶の吟をよめり

融廢宅の城よ放魚池個蛙草聚とよめり流るる

よとてよめり流るるよとてよめり流るる

一書よ西行よとてよめり流るるよとてよめり流るる

わかれすよとてよめり流るるよとてよめり流るる

愚考よとてよめり流るるよとてよめり流るる

たつて洋物するよとてよめり流るるよとてよめり流るる

入古池すくすくもそ等の一句を解くは是れ  
不可説 不可思議の一句なりつゝしおもしろ  
風を水青了物のさしる意ありされれば  
水の青もさるおもしろ物一は帰凡一は空く  
空く寂くもさる水の青を化よと評すもさる  
上の所はみりて玉と漆をぬり黄金と酒をす  
ふけ流ふ等一若此句意を思ひぬむと欲  
せも黄泉と流了後翁と面流してすもと志  
のん

社よたのたのむ田原の遊むれ漆をたき  
貞享元年の吟よていせし古物なり漆をたき

ふも漆をたきしりよ美のかの役もちとまはし  
たをたきしそし流かりしりよ美よてをち休字  
かゝるよ

よーぬよとぬるよん

飯貝や雨よとるかりて田原の

七ねえの指や古の鳥城織

此句古調にて浪の草をいせの後花と  
いふを浪句とせしれし

布子ささる夏より暑し桃の心

延宝中の吟なり

草彦よ桃様あうり人よ

さる角山風雪をおく

よむ此のよ桃といふやまの餅

愚考元門関曰世尊昔在灵山會上拈花示衆  
是時衆皆默々惟迦葉尊者破顏微笑世尊  
云吾有正法眼藏涅槃妙心實相无相微妙  
法門不立文字教外別傳付屬摩訶迦葉云  
句の意をわきまけなくも釈するすその法味をうけ  
つゝ才子迦葉一人ありさるを予もいふのたゞは合  
ありてのちを角といひ山嵐雪といひ西風のま  
地を以て永く蕉門の業む事や流はほてよろ  
赤たゝしそと釋する一日一麻一米を食して  
出苦勞拈これ一故予もかざるを平ふせられ出  
て暇は是れ飽きてくらゝとあゝ忽体なりとをば

のゆかりよは句を依りよふと見ゆらるる我かこれ  
正風俳諧拈花微笑の句我蕉門は流をくまむ  
人と肺肝をくらゝとみて信しそむる一中の餅  
の事十節録曰昔周幽王淫乱群臣愁苦于時  
設河上曲水宴或人作草餅貢幽王王嘗其味  
為美也王云是餅珍物也可献宗廟周也大治遂  
致太平時よ三月三日之宴よ於て草餅の好  
を依りく趣し

たれを餅ふそくたぬ桃の心

愚考病は沈て餅を咽一通は餅も桃の心は  
水に浸して脹寸そ又飲食の先ふとたりり  
又破すよと桃の水の念味感してあすうらう

任に上人ふきよく  
衣に伏見の桃代帯せき  
上人を伏見西宮寺の住持たしむるの急を乃  
美末集よひくくすけく白く教はく入るきく  
六もよすんせ落の志くく一に此歌をきけく  
とくしたるたよす

尚白と伏見へ移時

唯一束挑ふ宿かまぬ木幡が  
衣の白く貞享二年の吟をえ録四年  
に吟をく

内裏雛人形天皇此御宇とよ

一本と御宇とかちと出せつと延宝中の吟をく

人形と岳仁帝の時野見宿祢れ伏見の  
雛と聖徳太子の時代とくく人形と  
雛抱くく四百年吟くと又ゆ

雲空れ月心よかて信る  
方と人よゆつて秋風との  
必要又うつ

そよれ戸も信あてて代を雛め家  
一書又此と二冊のまつるして上巳の節  
をりれた雛を高く人籠の形をかくして  
愛おを入るくくして此吟あり下略  
清水木と流る仲の汐平が  
まの柳の流又志くく一不ひが

一書よ川を了の柳平をさるるふかくひちて  
ありつるよりよの波干よきめつるうた泥よ  
し泥しとちる

一書よは夕木の柳よとるん三井三日の白よて  
容顔美鬢の夫人汝干よ出て浦邊の泥中  
よ折ふしちるをさるる楊柳よ比してさるよと  
なき柳の泥よさるるこころよ似ちる

愚考王建の詩れ一句集柳條長水面秋詩  
却定却して穴窮居たるをちくつろけ泥  
よさるるこころよそれ條の毛よよかた可なき  
を又せたるあり  
伐株れ芽立を又泥と様ある

片泥よ云々いふまじけき木すえしこころ又いふ  
さるるをよみあはさるるけよりけの意あり

伊賀上野美所堂の初今よ

たつさるるおしとるよよき日く

愚考もよ書たのにおろの吟たる

雨のふりりれ

よ履の尻おろる山様

愚業するよ世説新語補よ曰謝康樂因父祖  
之資生業甚厚奴僕既卑義故門生數百鑿  
山浚河功役無已尋山涉嶺必造幽峻巖嶂千  
里莫不遍歷蹊常著木履上山則去前齒下山去  
其後齒是謝灵運の木履を草履よ替りて尻お

下りむと下山の後進を去のまゝして戻り山  
橋の正論を忍べ

世をいひ捨るところなき山 橋

古往よ云定や水江のあり引れ山ありのまゝ  
してきて身をかくすへき及やたえぬるの心を  
て橋よあかへたる白情のちやうと云く  
愚考新古今よいさうちるまは山を道をもつ  
かする世をののれいと来かひもあはれ  
れ借ふる我あはれ

功成遂名而身退

山は名をたてたるをくそは後あま  
愚考そのと凡蠢を賞するのちやうと云く

踐け上將軍よりて極しの討策を多くし  
呉王をこし退身し生涯を今より一鶴  
夷子と称すそ功成名遂て才退くの乃  
合へりといふ

水口より二十年を経て

故人よあはれ

命より川中よ活きる橋か

愚考源氏胡蝶れ巻の付たりと標するよさう  
そよかたなる言は八人かちちやうと評よとの  
させ玉ひてるふら白浪のそん瓶と標をさし  
壁より黄令の瓶と山吹をおさうまゝの序  
をいふ免しうせよまよふしをひをつくさせ玉



へりしと云々今より川とては壁と云々をさしつた  
二人お對したる今より川とては中か  
壁と云々此付の橋を流たれた今より川とて  
中より流たれた二十年の故人とては中菴芦馬なり  
橋より流たれた二十年の故人とては中菴芦馬なり  
お流あつたと云々旧名土芳なり

よしこれより

山橋瓦ふくもれ先ふ事なり

一書に延喜式小凡忌詞七言内佛称申子  
經称海紙一塔称阿良岐寺称瓦葺云々  
瓦ふくものとも一二の花王堂とてり成屋  
かぬれむあるよす思しとて入後る云々

愚者、言路山と金峯山と中て地中、皆令の山  
と山ふすつる橋たられたるの橋花之敷よ  
山の体たつた山橋と堂殿一山山と橋の体  
あふたふた山と堂殿すたつた山山と堂殿  
山と大悲閣をその對を又せたるなる、たふ  
あつた山のうすつて合せてつる對のなる、たを  
あつた拾芥抄に云金峯在和嘉吉野郡日本七高  
山之一也蓋尊出世其土石可化鉢金矣文武天皇  
大宝年中役小角此峯安置金剛藏王藏王者  
過去釈迦現在觀音當來彌勒也云々土石能金  
石化すともくもつても念ぬ

太子の良七ま七堂伽藍ハま 様

一書云私泉式部も一首の様字五字まで  
よき入るり 翁も七の字ニウまの字ニウまを  
らん 様さくはくくのももこの様をさくさく  
ありちる 依くまありりつれも名人のま及なり  
愚考曹松の詩も七千七百七十丈丈と藤蘿勢  
へ笑云く此句の妙なる知る一句のけふて又とは  
一も又つれはくく 文字をそくしたるぬすくあへ  
くもあもへらる

様 持志の持や日しよ又四六 四と

一書云俗流平和の妙とりよま此よあ持の詞之  
あ持の文々もき時と徒言たり又あ持の介は

いあちる 詞を入たやとも 持るんそこうくく 詞の  
さく此あえたり

一あよとく 酒くむかけや七る 様

一あよとく 酒くむかけや七る 様

一本に持の草もと出せり 鬱と鬱と文字は終ま  
あまの死よあく かくれとま長岡ありする人の  
心しよあく

一あよとく 酒くむかけや七る 様

此句は 嬉書心及日記よと故主蟬吟公の座ありまと有  
一本よと探九子れ思る 露の花見僕くさせむひらり  
ありてとあり

愚考 探吟りまと故人くまよあり

心三井うゝふかまつけり

乾坤無住

玄 野ふさす 橋又せうそ 捨 笠

一書ふ万葉丸を伴ひて捨笠けいゝゝ書身玉へりゝ  
悪考万葉丸もさゝしけふておれも又せゝゝ捨笠  
と後日記ふ又ゆ

古語も云風物も今日を捨玉ひたる仇語の字義  
客よあゝたゝれて乾坤無住やゝゝ天下も取らつ  
真像と謂ッへ

嘆ふゝん 詠れ 中よりそつ 橋

一言ふ云 柿柳桃橋と修くふを少 思末のこつゝ  
心々ゝさふを句中よあゝたを終ていゝゞゝを

效よみの先達おホー 山さくら

半日け 雨よる長ー 糸作丸

山名ふ二ふけ 陸 桑りー 橋が

似人々ー や夏の新飯 ぼぼ橋のり

ろゝ免の三分もさゝて何も及々ー 皇の粉飯  
此白を論決曰士志於道而恥惡衣惡食者未足  
與議也云々 友人の及ふ志す時惡衣惡食を恥  
ふものも共ふをゝゝゝたゝう以て客ふ於て祖  
翁の一尾を再具せむとの志ふ例の捨又茶の羽織  
きや粉のむすしを大つ作へて橋物とて丁と  
身かお意あうとて尋性けさるまゝ新のめー  
されたり捨 仍脚此心好書も是食 珍味ー

ふりく人も代事ふつれやす〜とも志多すれ  
た里中くのりき當時に〜とく及をす〜  
仍新す〜一人も何〜次在船〜ての上よ  
いとそ北た〜

木忠ゆ〜に汁も舞もさ〜  
七部大後よ妻〜

万幸のふの整

〜くや休〜をよやんふの整

上醜礮よて

苗ちとり〜小僧た〜らむ山操

主考

〜は東ら操よぬ〜仕〜

一書よ云「たつ〜山の色又〜  
上凡〜心志〜や心志〜尋〜  
夜をぬて位也〜と云捨て秋を月〜  
あれ〜喜と操よ仕也〜  
心をつける〜

愚考山をまよ〜か〜喜よ〜  
は〜妹よ〜た〜らむの意感〜

句空へけ文〜

〜山〜浮世の小石山休〜

愚考新古今集「た〜世の介  
去た〜む花めと不世のあり不の〜  
の〜かよ〜

新よ心ぬまむ句も出よ初梅  
続猿この御解よくを〜

わびし〜中や梅の〜の中人  
心よ人きり〜朝先せと自云  
〜美〜も〜んよ〜まき〜梅の織む衣  
寛文中の唯一号土著無と早うん

先志〜や宜竹の尺八ハハふふの雪  
延宝中頃の吟宣作も尺八ハハ久人久人尺八の音

上野より

ふ〜酔了羽織甚々 刀 指女  
早〜つ〜や〜ふれ〜や〜桐や〜  
篇幅も出ようきせれ花よを  
愚考〜一白〜延宝中の吟か〜ほり〜を虫篇  
又玄友虫と心ゆる人もあ〜一〜伏嬰とかれて  
原る方より三平六倉の内子ふ屬す故故又羽嵐  
とも書たを〜る〜れ〜れ〜我〜篇幅も本よと  
不るれ中へ吟出〜あ〜書〜れ美虫〜〜を此句  
句をあらさん  
艶たつる 奴も見るや誰の歌の梅

愚考延宝の吟なりつまつて予も新院のちろ  
居させ玉ひて此真よ中を玉ひしりつとこのや  
司のちれと乃ちつこよるあしりつとつこを  
ぬるよふそちつこく此清製れえつこを  
斃ちるぬ花をえとれて産もたつこつと云  
ふたれて白紙一玉へア外に子るのををよ  
ふとつけ白よち叶てはとるへ

憂方知酒聖  
貧始覺錢神

夢よ酒さ赤酒白く食

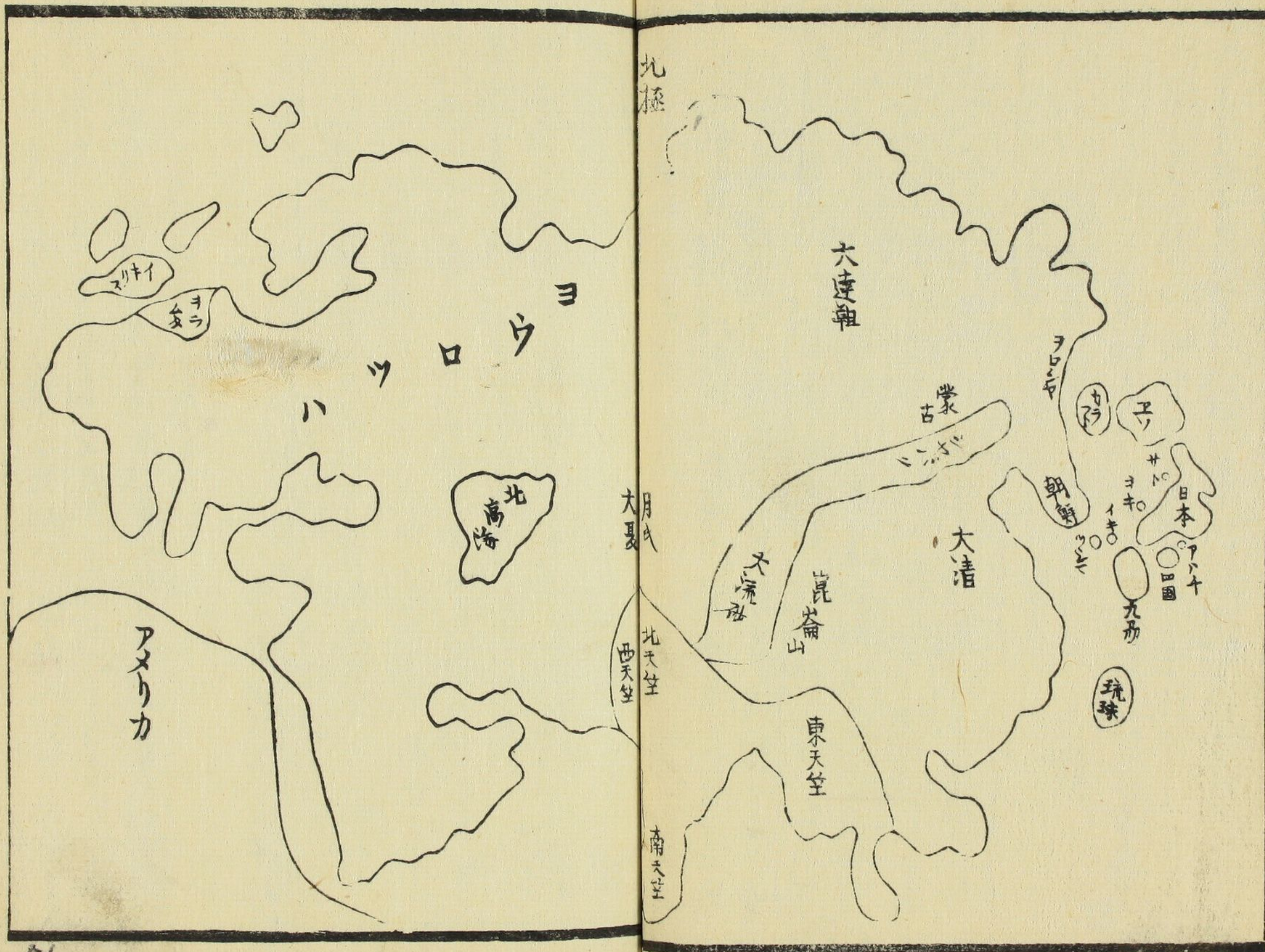
愚考

酒此をををといひしりつへのおち玉聖れ

夫之則貧弱得之則富昌無翼而飛無足而走  
解嚴毅之顔困難癸之口錢多者如先火者  
慶後錢之所祐吉無不利丁略此句天和二年  
の吟なり円撰法法よ美者曰醞紅者曰醞緑者  
曰醞白者曰醞是下酒之飯白く酒濃くはあ  
らてア、濃せちあ此酒白く飯悪くとおひの  
を句と志しやへ

阿茶院もふよ身よりつる上鞠

一書よふさあをつらむといひしり山阿は使ひを来  
しりつる子鞠は詞を括てをさむもは了まふ此の  
おのりれた花よよへて日本の威風も中よ花たへ



北極

大連

古蒙

大清

朝鮮

カラ

エ

サ

日本

ア

十

四

九

琉球

崑崙山

東天竺

大夏

北天竺

西天竺

南天竺

スリキ

ヨラ

ヨ

ウ

ツ

ハ

北高

アメリカ

愚考も解す所を鞆る天物此海の詞成へ先白  
を解むるも本末を委し〜〜〜〜〜人をもくち  
いへ〜〜〜頼政家集より〜〜〜つけよといひ  
〜山阿弥使をも事〜〜〜鞆あけ此考を遠  
此文句よ〜〜〜用ひ〜〜〜あ阿茶院を西に  
方歐羅巴に申西の海名はあ〜〜〜日本より  
海上二万二千四百里と云々唐土天竺より〜  
及たれ阿茶院までも我日の本へ来船する〜と  
いふ義之詞と申すを特〜〜〜合を日本を  
自称す〜〜〜此阿茶院の義を極よあ〜〜〜て日  
と稱す〜〜〜阿茶院もといふ〜〜〜の字より  
了國名もあ〜〜〜た〜〜〜未女〜〜〜も右の圖

す〜〜〜ら世界の地理をア〜〜〜  
再論秘説何の本れ〜〜〜白ひが〜  
此花も若木此花よて口傳列日の神此かく〜  
詞よて日を〜〜〜依り〜〜〜を賜ふ  
〜あ〜ふ〜り〜を〜く〜む〜  
〜よ〜て〜〜〜又〜此〜海〜の〜喜〜日〜の〜  
〜〜〜〜〜義〜〜〜此〜日〜の〜春〜  
〜〜〜花〜象〜教〜を〜極〜を〜  
〜〜〜押〜〜〜〜〜極〜あ〜  
〜よ〜て〜思〜〜〜〜極〜  
すれ〜も〜此〜極〜を〜と〜  
〜〜者〜よ〜



景信も花尺の産より七々集  
 一書よ云景信ともふは唱よる名りして七々集  
 としつ能信の平和く花尺の坐より景信らとら  
 定筋屋をこれと字をいふむらとそは能信此  
 魂よて俗流平和の滑整さる

古寺や詣る植持一花一木

三井秋風の写滝の音よて

檀 此木のふふかふたぬぬか

七部大鏡よくたす

湖水眺望

辛 傍 此 雲 ち 存 たり 概 たり

一書よ松栢よりおわろよてとすきさ本白り  
 ありんか三休あり  
 思考此論よら一木白ち梅をよらよらん者こそ  
 此をひらりて志のも云切て仕やよ木白ち  
 金情あり者こそ独立方り、然云格をやるの族  
 松もふよりおわろのあとも、之れをよて了  
 海よりありたりよ海よりありありがるの木白ち  
 寺三よく苗を用心す柳が乙るがの木白ち  
 者三よて苗遠意なり一治定する花ちよて  
 面よの引てよ海よのと吟嘆の上よて用持ある  
 あり



いへりとき

愚考も茶の銘をいひけし一書句を茶の  
あつた後米山峠の茶種を採りて  
素湯強湯一と婦人より是を無茶と白茶  
といふ此句も素湯と花の香けかつてく  
ちよけおまへ一祝の白茶と素湯をか  
たる句なり

瓢箪中庵子膝を入る旅の

おもひ窓安かつられ

不を宿にすめ後日二十日経

袍儀云酒を煮よ一嘆一よ可ちつとつ  
まし刀一福に茶のともよて二十日経よりけ付

或書子宗を亭と掲書ありいつての  
さうむさうも休りたつてさうむさうか  
たり半る句もゆりいつてよ可ちつ

よ一能よ

花蓋山ち日頃の歌けけ

愚考も昔中山に絶景とて名文鏡と云ふ  
いたむのちかき名山のまじりて  
とて故て景を誇れむちりたるとて足  
ふけつてつてつてつてつてつてつて  
貴家陸一の名句之試は後人をいさむ  
并替足腹をかさつて女は素衣を履け

もかきしめ容教は聖賢をうとくしよふひし  
かつしき山は禁城をうとくし  
四方は星よとる山くしを  
了了たるゆけのうとくし  
幾あるふかき神の法からち  
あしとくし君くちさの  
くせよひつるへ伝はる  
れんししもよゆけ神の教  
ち智大徳よあし

けしをさよれりよあまし  
右香や花は猿出の捨ひを  
志けしとくしの色あるるあ  
本ふふれよあし

愚者かよと非なる若かかの事よ天酔于  
花桃李之盛也日かよの色よ碎るよと  
りよ意たしとくし志たしとくしの又文字よあれる  
れあやさるちんく夜陰れをゆよよつけて  
花の陽をささめ月の夜のひやくと皓く  
我妻しとくし必きあし

竜門よて  
就門はよや上戸のたまよせむ

酒のこころをいふにむかひの紙のむ  
悪考いつれとて空やのこころをいふに  
物語の雅通お長にむかひの紙のむ  
いふ山休くくりにをいふに  
茶少将退くくりにをいふに  
風よちくくりにをいふに  
を後のふちや中をいふに

略草一草

身衣れぬとてをいふに  
悪考をも私記の詞をいふに  
おらむれ七文字をも私記の上よてをいふに  
としてをいふに  
いふに  
もた山にけれ下もふちぬとてをいふに  
かゝるふちぬとてをいふに  
換骨にあはれぬとてをいふに  
了たれとてをいふに

酒房堂記

山を舞うてをいふに  
水と動てをいふに  
二のれ間をいふに  
了濱田氏取願をいふに  
佳境をいふに

こゝろ酒をすすりてあそびをあら  
ふらあゝ海原半とつら門は戒備を  
かきくまふの門は入るをゆる  
されとからと彼宗燈々定なり  
おーいさうされうさふ二筆くた  
へくおうー且それ前より  
方丈ちるもの二回休紹二子  
此院を次々志うその乃らるるを  
るれ木を指石をちるる屋を  
かすのたさし軒とち守柝お  
しれ浦ら築田幸徳をた衣の  
神のこくしては哉抱き

こよ山よもりう海と琵琶川か  
たらふ山に松れ雲彼を志ふ  
川敷の山に良形る根を斜小  
見うさる羽石山肩のあこりま  
なむあさも等山れ糸を繋み  
かけして鏡山を目をよるる  
縁粧縁沫の日くまかたし  
うことー心道能風やも中  
さうさふたふらふ

四 方よつてふふま入るる海の海  
愚考山を移りて性をや一たひ水をまかこ  
情をさくさむとも思子を なたのりみ聖人

を舞ひむとつるをりよ

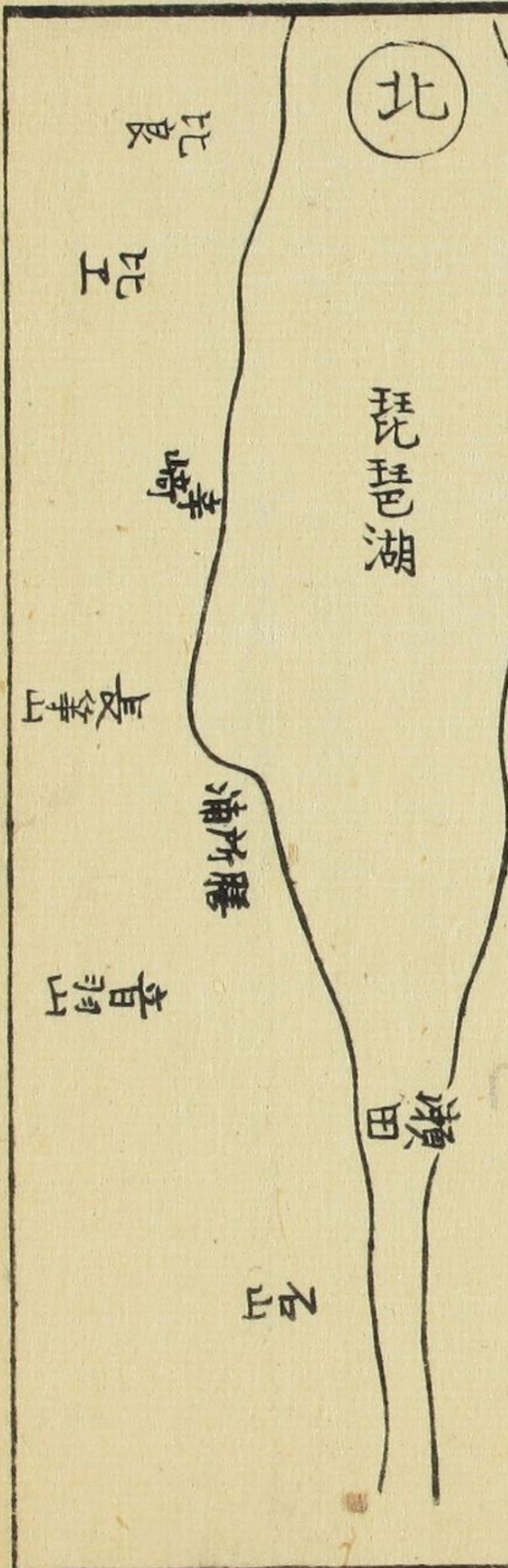
酒蔵とてニヤレとてふ事なつて莫山谷云周茂叔を  
人品とて言く胸中酒蔵たるヲ光風と秋月のとて  
言酒客とて言く一丈はさし一丈はさし茶室とて言

又僧坊の方丈も同るたつて四角すれは秋のま  
よ委しくは後

休銀二子とて紹隆利休をてはるも右社のまよ  
委しくは後

ふもの浦とも膳所之膳膳と書膳所と曰茶  
多り山王の御膳所なる七部大後よ委しく  
比正比良音羽石山長等湊山とてはるも右社のまよ

とて言末たふくもおもひまふるやとあるは因す  
淡粧遠沫とも若採西湖比西子淡粧遠沫西  
相宜とて言ふよよれは淡粧をわくよよれは  
まよるりよ淡沫ともはくあわくおなるり  
まよたふりよ唐土の西湖の景文は比  
琵琶湖とて言はむるたつて  
上三上鏡



支考の階矣へ下るを送る。

けさのろ推せよふりー 又巻一具

一書よ之期雨や交々まよ秋早て中よくてふは志こ  
せむれまみりて既院も食の旅はよ岳戎の一句と之へ  
一書よ此解引おれまよりて向上の文義を初書れ耳よ  
着かろー 又巻一具りてそてりも是れ以上を大者  
たよさるー 又巻一具りてふとの示戎をア花の以を世の人  
心しうまきかちよ思ひしよさるる大者も出来てを蓋の  
合限をよきよおたよとそ志を二具の又巻よおま  
て生涯をあやつるかろとたよ

種芋やいお書りよ書出 以

一書よ日む盛の現在よりま末の満月たとおも

て種芋れいけ合全情は

いせよまうて

何れ木の花とを志す白ひが

古はふ云西上人 何れとれおさるるれいもさる  
福とよかろー けさまよたよるるお布るるの心

二具を評みなるて

ういふよな書れはよ浦の書

一書よ云二尺の糸をおく信りてしよ洞書らり  
後れむと別彼の糸に他れ書し誠のおもはる書  
又の和光りて神徳の有りて手を感一むさ  
ふおお持の文をまおりの杖を刻て書区  
よすらうふは白自書よ書よ



伊加美此玉花垣の庄を侍首  
系うらのいき梅此料又附ら  
りといひ了へ侍れた

一 可もさふふも此子孫のや

七部大後よ委

尾張の門人より清沼一橋木

吾此独法茶一様帰るを

人くふひらむとして

飲ぬる花をさませむ二升 持

いり山今守

此陰 硯かたる 丸 尾

日をもよく許てさむいりやぬり 持

あゝ山にて

此山二丁の本流を大悲 図

愚考此山の梅より飛山亭の佛時を歸り  
うらー梅玉つる急流を以て此急を山を尋常  
の山たる事とも名花の種をうらー 植たる  
ふ花の山としてふを説ふ事とも 信りし  
ふりしり 此山と山あり山ありれといふ事  
梅を描ても土目の上ふ流あり名をいふ事  
字より旅てを歸れり山梅と山を亭より  
たゞ一羽の大悲圖を結ひ入るは此急の  
梅此急の解みてり 今せてさむ對急の如し此  
急味をさるへ

路通の陸路へ行く時

予枕をふくみ思ひて来た

愚考する所の不思ひも心裏の花ありて智恵  
此なく三心教を来よ云決定審理謂之智造心  
分別謂之惠華者円覚經に心華發明聖十  
方刹疏覺心既明即惠光開發觸向無染故曰  
心華云々心裏の花をさかぬの月を云は月花よ  
ありてたと一此月花をさかぬ心をかく種と云  
る  
又一義ありてえ来路通を食ふく路路よは  
たすくを祖翁引上り佛指すを仕玉へり  
とや歴く此佛指はよたすて人並の交さくも出来  
而へ下るたされたる人間並のさかぬの花ありて来よと云り

も解きよし祖翁の子凌よたすたり木蓮の  
根を尺で測る

子と飽と中人よと云もたすり

愚考する所の経説よ曰愛無邊子至極大聖尚  
有愛子之心況乎世間蒼生誰不愛子乎  
「白く縁も今も玉も何れもさすれたる  
子に志かえやも又朱子か釈云父之所貴  
者慈也我子を慈愛するも愛すりて  
けふへも天竺和合して万物之類す  
と一それ人を了す抑の是た陰陽昏

合此乃理をよく毎へちるべし父母ありて  
子を養ふすふは縁て胎教として母の胎内  
居る時よりしてそれしれ才智をつくる  
毛りれたる時分 胎教の句十は七八も教我  
人情れよふやうにさるるまふしそむる  
てくア

あはれをいの木くや谷のむ木  
れといふも何のさのよま後  
とすましくあすまいさくま後  
唯生茶一掃れ樂しみの糸に  
河原もくといひくして後  
賢者れ謙をこく

さしひりはあはれあはれこの時タ格

一書上孫氏孫美の契よ云試まを侍前してヤサ舞玉  
ふ孫氏も休彼をさむい玉ひりるにまよると大屋の  
頭中おかしち月を念くよま呉たふるをさ並ひく  
まふの側乃孫山木ととき 樵集お中整え情お  
二首依まふア一此家のうま二心とも勝よ定アヤ  
たこれのま外の地のかア一此家のまよまをふの  
あつらひの孫山木れ心地して意苗る人もまよると  
云く山木が舞まう「たくひまままを」枝よ咲すれを  
横よまままの本おたよまらる又貫之の「掃よま  
まままふたふき花を」終をあまらるま木まものま  
死たうくに

孤石摩笏へゆくを送りて

むく起し隣れふの白ひりま

西行上人の契

捨ててくちをちふきとみとおもへとも

雪の降りてさふくはそ阿婆ふのみ

月をうのれさすれ

一まふ西上人の契をそ候て有れ候たりとや

たつてかゝり

傍き吟然ふの辞

杖臥し草鞋をそきり笠の内

名をあくそけ之縁六とせはせ

は和傍き金武右の東原川

麻を罷て既ふ一歩を始むとかく

此傍常し風情をぬく市をさ

けりし身し斗着は行旅の身と

ちるる今う年ささいせ無路二傍

むとけちをそあふれ始ふ等

く流は留をそ見千石の島

翅を振ふて野は伏所なる

む胸中おきいさげりし平春

の交りてをちりて久し今は

別ふみなるもくはる山峯上り

立て相根山遠ふ又や他は

雪のくちあふふらそ旅終り

嶮難はくまきりてしぬれ  
思かたうす首ぢめくせく  
見よおやう此岸よふむと  
云く杖をかちぬ

袴の毛は思ふ衣や花 不ぞ

抱後云袴の毛を織込し衣方へ  
赤壁賦よ適有孤鶴横ら東来翅車輪言裳  
編衣憂外長鳴き

露沾云て

西の序もあむむ花 不ぞ

一書云云露沾云と内者下野也

の陽を

百八

又了石を鑑み祖家と文遊屋前此序文方を  
吉野山は比して西の柳水一序の流し有し之

中庵

親喜此夢見也了つ不此中  
花の中 鏡を上野り 鏡中

右序云其角云鏡と上野り此夢見也  
一聯二句の格ち了句をて句と

去来文云上野り此夢見の句を鏡臨空雲を遠  
到の念ちる

又考一聯二句此格と菅菘相の都府橋終  
看瓦色一親音寺只聽鏡あり瓦の色めを貞  
享三年の句方と融鏡ありの吟を三三九

肅山の雷うーうー探雪の画  
琴うたの絵よ

ちるさやうるしおとく琴の巻

古江又云源氏若菜の巻ようて詞を用ひし  
句たうへーき

一書よ云そまふ春の画の賛へ劉向別録曰昔有  
善歌者一虞公鼓声排也梁上塵心よかよへか  
梁上の茶をさるむるよいひかたる。沈潜のよつ  
よ尤千練と称す

一書よ云史記晋平公曰寡人所好者音也願聞之師  
曠不得止援琴而鼓之一奏有玄鶴二八集千  
一門再奏之延頸而鳴舒羽異而舞白意うたの画

見、一、は、琴、の、流、入、の、深、く、む、す、む、く、  
梁、上、の、茶、を、さ、る、も、排、ひ、は、顔、う、ま、る、色、を、も、感、せ、  
り、む、し、と、琴、の、徳、を、称、せ、う、た、  
よ、へ、の、と、信、縁、の、松、山、よ、う、某、の、お、ま、傳、へ、  
一、之、幅、背、の、抽、  
た、有、以、白、を、中、う、て

んを教

ま、海、や、を、教、ゆ、る、ま、其、比、を、  
素、生

中 琴

ま、ま、や、を、も、お、と、く、琴、の、巻、  
芭、世、

右、年、逐、鳳、凰

げ、か、め、相、の、後、葉、や、を、れ、を、  
其、之、田

思、考、若、菜、の、巻、の、詞、も、源、氏、よ、信、都、み、う、う、琴、

をたてりて了てそなたはひらあそそて  
きううも山のきもおとろういほむとせちふ  
きふえあへたとき

既よ章孝標々句よ梅花雪を奏上云と彼を  
み合されておうい

玄席子う保川の彦を語ふ

おんあふとさる舟遊い柳示

一書よ云戴安乃とつふ人のちるんむして酒着  
細へ小舟舟さう友人の方へ漕舟るに既  
おのこよふおのちを了るんむと思ひま  
ゆめれともたうや奥ちうい友を何ふよ  
ちりてるつりるとは念をよはる

と思ふやう

橋をふと森とこころよせぬそ

むい森ぬ妻れきものあふよ

茶よ森ぬさくおしたくひを崩の葉

一書よ美はなれきよいかたうれたて花よ木つ  
うくおんの中くをうさて移るよをせぬ  
愚考よ森ぬきものよとて海へをま  
れきものよと書いと別うくひすのかく  
詞をうと崩のよと森と森ぬとつよき  
あつ改移んむと引うけてあすのち  
と森すゆすをそと森ぬたくひうと魚  
たつものよとお伊の詞を句よとせん却て





百姓の身も業畑の飯を耕し、秋休めよ野に  
腰つちのりくくやめて此業種を十かよ名入る  
なよとふかやのよませくく之やうくふ又新よ  
おはらふ体をかくも飯しむあし七部  
大鏡の炭徳ままれ花の柳袴の飯と川合せ  
尺へ

大津へ出ふる乃の山路を越て

山路来たる何やゆの萱中

さくく多も何くちくくふく又文字あつて  
山路来たるも再業あり 山桐山りて越され  
つばすくみれ二く不三く不られそめりむ  
澤念たは片此ふのさよ叶へり

悼呂九

尚歸よつとあさくれ多塚の萱 中

書よ云サ意ぞ細句解へれ孟道り詩ふ藤非草示是  
上孫子莫送春香入客衣藤非草の一名當屏又  
楚辞九款曰悲莫悲兮生前離此句れ心を精  
一たつたよつて當ふ屏るへすのふれ福悲友  
別れちたよりれとけ死別と史よつてしれと衣く  
とつふ急まふ、董と塚碑の思ちと思るへす心を  
持せしとそ新古今一石よふまふ一人を大  
つ杯むとあれくも君ふすくれつてさう  
一書よ云代まよ久く抱ひく在ゆ、遠志を送れ  
ア遠くよま思ふとつて心たよつて返りてよ當屏



山吹の春茶のふれかたち教わさる也

一書ふ云延宝中の句みしてふれ色のるさきとわ  
とつとをりふちう山吹の色はけおされさる葉の  
むをかこち教ふいひたう一書さる能治の一奥く

山吹や字治の焼戸れふちふ時

一書又云け句を画賛の一書さる一山吹さる  
治の書名茶の名は使さるいとわら一書今集  
ふ一今もかも嘆句さるむたちをさるのさき  
うささる山ふまのさかる風情さるいよさる  
れたう

吉野西河さる

不ろさる山吹さるさる滝のさる

続猿みれは解さる

山吹や筆ふささる枝の形

畠さるさるさるの楓麻

一書ふ歌畠さるさる楓麻のひさしありさ  
うささるさるを述さるさる

陸尾の志まもみさるさるの物

愚考陸尾のさるさる楓のさるさるさるさる



守湖の惜別

引其在近江の人とをりみりる

二句とて七絶大後よりす

千位よりいみよと上り

前途三千のおもひ胸

うらやましくわのちやうと

離別の細をそく

引其やるや魚れ目とをり

一書よ云え得二年矣れ細乃苗おの句り

跡よそよものを魚に比

一書よ曰杜甫春望の詩よ感時花濺淚恨別

鳥驚心又文選よ王鮪懐河岫晨風思北林又

古樂府よ枯魚過河泣何時還復入

瓶向の句なり

愚考を解す知三別ありて一句を注す

此八本ありしが孔子家語曰鳥魚生於陸

而居於陽故皆卵生魚遊於水鳥遊於雲

又東坡の詩よ三年飲泉水魚亦相親

魚多三年の親みすあるに況や祖翁と

東都よ十年ををり免られく所を離別の

情今服茶ようかひく及ぬ世の交情よ涙

をもよふしやしてま時ををりよる左よ

世とおもひやうとをりよる



いひあぢよるゝ知あるへき白なるゝ有る本文  
ふま考のよゝを合せ了或日抱儀氏画今より  
引くて中庵よ立よ了をも日の至画なりとして  
松下に寺子を写して持て来しよるを  
寸ふふを展観すよ老松緑を合みて  
丹を志くするゝとく寺子れ而もちを  
糸とくしてあいたははるちをりれも志ん  
一尺とれくあつてうちふ因賈徳の詩の  
侍心よりへりそふを此句の出ふれと始て  
白急れ作するを急れり松下向童子云師  
採茶去只在山中雲深不知處 上醍醐の作  
かり下醍醐より上醍醐を三十七丁宮山極

けふ論と明くあつてあぢよるゝ山奉入の品  
とつよる方とを留ちするハ傍よあぢ  
らひ赤休らよの振也入るゝとく寺子を  
々々一杯深雪山醍醐寺を志ん言案よて修  
發道なり堂山の派あり用基を聖賢  
とつよ之論の志ん賢聖義を志る  
此師小路と初東大寺此東路も鬼堂あり  
聖賢法ふく修れ鬼を現しと拒む  
ふかも屈せり鬼化ふよつる云と或時松下  
に書を讀む侍よ茶盞を並て昏騰し  
侍よ夜半大蛇梁の石より下るを教案  
申よ又四則作句く此寸蛇たちよちよ失ぬ

又金峯山に後組役行者の後さうに、行路  
たつたのうらうらに、在葛藟を踏ひ、さう入山せし  
よ、了苦行此者不絶峯入すと、貞觀年中  
醍醐寺を起し、顯密此二教を演ふ、余  
け丹波救拳す、にいさるあ、及延喜九  
年、七月六日逝す、年七十八と云く

一日、倅公石入束して云お七、ゆ、浦のり、以、日、東、海  
道、名、必、忌、會、を、足、合、す、に、之、家、父、の、解、と  
し、と、遠、へ、了、大、切、の、り、を、れ、え、人、う、り、能、く  
ま、と、了、了、と、云、く

愚考、は、る、論、す、に、及、た、後、と、改、ふ、あ、り、ま、し

を、記、せ、し、と、兼、忽、ち、り、人、皆、は、名、所、を、今、を、ち  
又、さ、う、一、概、ふ、杜、撰、の、り、を、中、さ、た、る、予、の、解、後、  
を、下、に、ち、り、を、り、れ、を、法、人、此、と、く、し、細、得、す  
る、や、う、に、解、へ、し、ま、も、れ、く、文、字、を、供、濟、成、照  
温、叙、此、書、方、あ、り、と、結、ふ、照、所、未、も、上、あ、り、  
と、今、体、お、も、れ、と、照、所、ち、り、と、必、定、ち、り、ま、る、  
陪、照、陪、と、玉、篇、云、步、回、切、随、ち、り、加、ち、り、助  
ち、り、蓋、ち、り、家、長、ち、り、と、陪、長、ち、り、ソ、ル、ち、り  
陪、猿、又、給、仕、人、ち、り、又、山、王、の、所、照、所、よ、く  
全、お、も、れ、浦、字、義、と、し、ひ、義、お、り、と、し、ひ、文  
体、と、し、ひ、え、む、人、迷、ひ、を、さ、り、及、へ、し

東海道名所回會 卷一



信濃の國に粟津川流をりて一  
林下裏一鮮魚を日次より貢せし  
不上免るると多し拾遺集に  
時におもひしをあらはせし  
是の日つぎを急遽とてたし  
方より急に去るに遠くめあ  
け久しきく此より日次川鮮魚  
おひき山正神社と人皇三十九代天智帝の  
所を記す凡千百六十余年より  
凡八百一十年又千代より伊  
凡八百一十年又千代より伊

いふも舟人ふあはれされたる三百四十年も  
降りりり四十三代元明帝都をたふるにうつ  
一と十代桓武天皇此時今川平安城に  
遷都あり凡千余年より急遽の  
後の日次を近にたるとおもひの流と  
よ免るると味ふ

かきこめて去る堂類の銘に解は岱山の注和  
漢名教合類之用あり春と斗ありて岱山  
ありそ等も亭臺ありせしを川や  
うよりのたきものよけき  
そも藤原の一方り凡の人春山と有るを又く

岱山トウサンと云ふ行方しと中ナカとむム斗トウ了リョウかカ字  
葉エフと云ふ泰山トウサン此コノ字ジ教キョウ方ホウ王オウ篇ヘンと云ふ教キョウ方ホウ  
本ホ一イツたれタレと云ふ一二イツニ方ホウ一イツ方ホウ康熙カンシ字典ジテンと云  
岱トウと徒耐切トナク又待戴切トナク又度耐切トナク泰山也東  
岳トク為ナリ岱宗トウソウ者言万物更相代於東方也山高四  
十余里凡十八盤由南天门ナンテンメン歷東西二天门ニテンメン至  
絕頂ツエトウ上有泰時無字碑トウジ其祠曰青帝セイテイ去黃  
河ワカ二百余里岱トウ胎也宗ソウ長也万物之始陰  
陽之交觸石トクシ層寸而合不終朝而編雨  
天下故為五山嶽之長ゴトウ五山嶽ゴトウ東岱山南  
衡山西華山北恒山中央高山コウサンなりナリされ  
た胎トウ字ジ万物の始シと云ふ五山ゴトウの長チカなる

高タカと云ふは泰山トウサンに云て嵩山ソウサンの字ジをいへり  
是文章シヤウマウ此華コノなりナリと云ふ

電風デンフウ呂ロ梅バイ梅バイ志シのノ小コ系ケイ

ハ激シバシバ電風デンフウと云ふ都名トウナ所トコロ固令コウレイ云クニ天武テンブ天皇テンノウ大友  
王子オウジと位イをオあアそソひヒ王子オウジの軍兵イクサ退ヒかけケなナりリて  
矢ヤを射イかけケ收ウめメてテ矢ヤ所トコロ脊セにニ中ナりリるル衣イにニ矢  
脊セと書カきキ而シテ不ズ電風デンフウ呂ロ梅バイと云ふ帝ミカドの矢ヤ此コノ跡アト平ヘイ愈  
けケ為ナるルと云ふ一イツをオ始シと云ふ今イマも電風デンフウ呂ロ梅バイ七シチ八  
朝アサあアりリて何ナニれレも固令コウレイをオ名ナをオるル凡ソト呂ロ梅バイと云ふ  
松葉マツハをオ鏡キョウにニ功コウ能ネイ勝シヨウるルと云ふ  
本ホにニてテ新ニのノ多タと云ふ所トコロなりナリ梅バイと云ふ世ヨよヨ梅バイ  
中ナカもモ世ヨよヨ合カはハしシ木キをオくク屋ヤと云ふ焼ヤクたるルと云ふ一イツ也ヤ

予よとく言葉の志をアノトシテ天皇ヲ依身  
此上を筑たり

素雄云芥此飯の白此詞書此内一本に令泥  
坊の芥と云ふも昔老のハヤノアノカマハ  
杜子美此白に飯煮青泥坊底芥といえふ  
語りてまじ字と今之字は書たるカ  
社律小盤剥白鴉谷口粟飯煮青泥坊底芥泥  
に白鴉谷と藍田縣東にありまじ泥坊と  
南にあり魏青泥軍を造坊と防と同一白  
鴉谷を泥坊造此の云々して蔬果の煮する不き

ア、春く大哉 ますと云く

若連兼也不二を足て其なる江戸の表  
冠山公之芭蕉翁伊賀より仰て江戸下りまふ  
ときのみ、きり不二と曰ふ此若連兼也つら  
まわり彼是つつけての趣向と云ふ

天祥よ京江戸かけてよ代孫ま  
同君の云是も衣小同く是合せきるもの  
かしきむもつてりせりかきまの表

公石云加毘且を阿茶院船のそくして渡海の  
働きを自中よきまか、阿茶院の地よ居る  
是白と阿茶院船入津のおかめ、今体ま  
是ともよ投せーにけりま、阿茶院の地よ居る

よて播を折つてそす。是君の代の威光を足  
すもみく

けし買む葎の宿め新妻

ふよぬぬ木や腰馬き梅根性挽

江のふにまき魚のけく梅比ふ

あまふしあまふしを引ゆるも年

梅咲や白の挽木のよさ曲り

世よ白一梅花一枝の驚驚

冬の驚驚の季よ半り也

お子良子の一とこゆい梅の花

七歌よ流よ委

白妻七十九

魚方、つる曳やここりも牛の玉

愚考牛の玉ハ牛黄なり牛ハ玉首子のハ才ハ

花ハ光あり眼ハ血色のハこり金ハ水を入れて

足すハ水ハ吐ハ鶉卵の芙蓉の也ハ陰子百日

丹一てかハするここり又生黄角中黄肝黄也右

たこもんや愛せらくさくそね改る

かろつとを大いみつてけ猫の意

此ハ文字あやハ恙中ぶらハと猫ハ毒の足え

もそれかりうあさくさやうあや

菜ハふよ成てさくそねこり妻

菜ハ度き徳あまてさくそね此ハ

是れ中へ右洞窟を了らんとす云かけよてその  
いふきと家来衆のさやを忍びるさや

画六

我々山の中へ一本柳うた  
さうさ雨ややうさ葉よゆる葉子終  
ま雨やちり志行まきける低れ具  
さうささうさ踏るさうさめ路れ亮  
門人よ對け  
梅禮も一歩つては回打か耶

圓角の扇の賛をやりて

まおむらもさうささうさ白ひこのさ

愚考若中女の児よとせよ心さうさひさうさ  
その娘さうささうさ女くさうささうさ  
いれさうさ

乳母に依する下り乳のさ

乳母の未考

是れつらめところを古もれ董が  
花を結如目ありんさり鬼サ刺  
さうさ雨ややいてちと妻もさめらさき  
蒲公英や熟も芽ころめねれうけ  
古寺の梅一葉ふ心男の那  
さうさ是れあし中さうさのま一  
愚考林一ふさ二ふれとハ鞠れあしをさうさ

くもく 流鞠の 根源もへ道入納云為定に北極座秘  
抄よ云英皇これ代りて出を首の形之と古きもの  
言ひ書り要略抄よ云本朝へ渡る古又を三十六代  
皇極天皇の御宇なり君よりを三十九代天智天皇  
をいめて是を物あふにち大職冠をいめて  
流せし心解相より拾遺納云成道解しを解し流  
能れ初より又無双のよよとくか成成古く之  
史流鞠は名来りて流を井系後物流に流波  
来りて之系系長に之又時流此を流と成道にの  
三十九条式よ云正月に公事かち二月に流  
三月上旬たる一清明祭二日ありを流とく百三  
流る云く

又云流鞠長の事も一丈六尺或又流能の中よ式  
丈斗りりる人もあを又流道にちをよ入と号し  
てかひたれしとくけとく鞠をよ入て流  
又く流たりりるふしきとく云の流もよ及  
かすし云く  
又流能のり事とく流しとくめておそく果へ  
しとくとくとくしめてとく果へしとく  
ましくれとく則おそく果へしきの流とく事  
ち事よ流のかけ合よてやとく流を鞠し  
喻へしとくとくそれ流の日に流白も柳よきか  
けしとくとく流は流をふくしとく  
白流よて流あるとくなり

是よりかきしし以蘭の詞書あはるまき白く

甲斐猿橋

あつらひく日れすふ谷 ちよふふ木 ちよ

愚考も子やのめくくく古今三をり如傳よてむつじ  
一洗に猿も馬も先を定かきししをう用ら白よ  
猿まは狂こしてあげとふこをさむつかし  
人こ毛く之心ゆきして子もさといふ白ハ別猿之  
おまゝに伝ふて

此以人のいふをきげを 芭蕉の碑ありて

猿ぐーや猿も居る。かき北上

祖の白はくしし着子不審ありを。癖う白よ

かけたししや楓も石也。笠のうく

夕ハル八十二

といふいたしに池接ありむら白をきしし

うつくしき。かきししは是れ非う我をきしし

迹もや核なるしし。休 此 又

愚考迹もも激はあはるは武苑也の暖脚美  
の事文かけてるの案未だ地まは備さるて白く  
あはれあはるく見ゆるそのまよいしつて見よ  
又介の字もそのことく見ゆるをかきししとさ  
文林多きに「吾書」はあはるといふなる。迹も  
ふけかきしし世をすししかなまきしし白く  
をいししとてちよちよのてりなれを非の美  
はけあはるしとてちよ猿のたのしとて白を迹  
と與ししたる年よて此名所もちよあはる





かゝる漸く高義を借換とて  
朝鮮人の淳瑯瑯の文句おちよう  
あまやあひをまやうとて  
鐵指の摸換なり長崎の密平より  
そゝ鐵物をそれを徳屋の形の上  
梅の木を鐵とて一嵐をう徳屋乃  
形をさしそを通うとて海のけり  
漢志をくるととて

愚心評一ちや一まや一あまや一とて  
詞うあれをとて一黒木赤火よ  
一向う解せず但一黒木赤火うその  
鐵物をとてとて

おちるは凡そ皇帝は下かま

愚考此皇帝はそ宗白皇帝のそ  
けいしとありそよふちりそ揚貴妃たり皇  
帝はれよの心をそとてそめふそ  
に成りしそそそそそそそそそそそ  
後してそれを馬塊とそに害しそそそ  
自在のそそそそそそそそそそそ  
ゆてそれをそそそそそそそそそ  
をましてそそそそそそそそそ  
ひしの上とそそそそそそそそそ  
そひりしそそそそそそそそそ  
そあそそそそそそそそそそそ

賜御一て皇帝上中下之...  
ら凡...  
多...  
一...  
深...

後...  
け...  
た...

を...  
白...

白...  
頃...

白ハルハ十五

月...  
也...

皇考俗...  
寺...  
根...  
防...  
出...  
必...  
ち...  
當...  
放...  
可...

たしむるこそれうてちう年おへりてた  
くあふも事だまきくともはるまき  
一後敷盤に付もちもあつてちもあつく求  
きく解きしむ

待消て花の考と持文へかま  
柳亭云え流之三の水撰歌曲よ又く水と白  
右相くあめり

花のよき美を歌とめて交まらる  
めてくくくくく海鏡の候よりしぬるは自出なま  
是よなして死してしをめぐりくさちりくく  
俗候しちり

ちちりーちちちまきまへむみぬ

白丸八十六

月よむくちうふよゆちたはかくかくむき  
そのくちを野へ今又まよちちちちちちちちち  
とちちちち古湖く

被膝もあれちちちのよーぬ山  
大出ちちちぬちもむれ 日景  
花五書ちち休む

ちちぬちぬちのありちち花五書  
世よさかちち花の念併ちちり

五考大信正慈念いつくもたこさけゆきして  
たつぬともふも法法はあかり又法花経  
方候品よハ草木國土念信成信の心よ念やて  
ちちちちちち自然と世のぬちちちちち





守武と伴勢山田比長官よりて宗鑑と左太の言  
 名世の如く宗鑑より大抵彼守武より千句あり  
 貞徳ハ松永安三年秋八月近衛龍山公九条  
 政山より細川玄旨法不法眼細巴法橋宗康  
 等より作し是誹謗一道の宗匠免許ありて俳諧  
 此式自を修り御筆と稱し是則俳式根元の  
 飛渡之門人より之圃重頼貞室梅盛西武  
 季吟令徳以上貞門の七傑と稱して京都に在  
 位り又玄札徳元未得加友ト頼以上五松と  
 稱して京都より修り甚甚其の則季吟の門人  
 よりて長政の孫守りたり若識宏文竟正  
 風一流の祖際と云成玉へりむ屋さるるかた

句ハル八九九

詠言は是難解 長く強きへこそ  
 愚考是を春句と心付て句集よせしめて  
 注釈を加ふるのせはひ大キト非なり  
 是ハ信徳七百五十韻の次歌よりて八百韻目の  
 三の表の句く既よ七百五十頁の強きと  
 ニウ換投をせしめてはしむ心するはと  
 中しにかさきての妻もあるをく  
 三ウ詠言の是難解 長く強きへこそ  
 遠句以ラ莊子ヲ可見 矣  
 桃青  
 其角  
 才嘗  
 是を委句よ見る所を解し季をさしり三  
 禪骨是附句の強きと考ふなり

酒呑みきふ人の画よ

月花もさくくして酒のむ櫛の那

色蕉庵とて火のぬま彼おて

阿茶人の許は春をわむりくま

朝の梅子雪の雫かゝるを思ふ

深川の松もさくらむ 五五の梅

なふくそねらつおふかろくむの侍もや

谷川の春の末さうり 蓀まくら

此白葵の畑うちよらえこけ

燃一かむや墨子芥焼をえてもけ

丁癸云蒙未曰淮南子曰揚子見達路而哭之

其可以南可以北黑子見練絲而泣之為其可以

黄<sup>ニ</sup>可<sup>カ</sup>以<sup>ル</sup>黒<sup>ク</sup>ス 此侍をとらうらと見えこら

愚者杜律は盤剥白鴉谷口粟飯煮青泥坊底

芥<sup>一</sup>は白鴉言く藍田縣東はあつ青泥

坊と縣南はひりかの孫つて糸の黄は漆と

墨は漆とむらを打たけく其意をとらて

芥の飯も毛も此のそかもあるるもなまれ

芥焼よりしてと紫のまきも根のふきも

けの黒きと灸漆とれて俱に糸かたるこ

めつちやよさくむらをかすむとさう句の

よみしと燃一まむや墨子と切く人の芥

焼すも成えても松と二切よ吟せすむを

自代のわりちりひみせふよ吟すす時を

墨子々自分其焼きくを代より燃しむ  
やうにゆさう

好くや名もなきまよとせむ 紫

相國寺より

学より感あふ竹れをや一し

五考相承寺と祥宗五山の寺二りて一宗基ハ  
善窓國師二世妙葩足利義満公法連をせり  
寺領千六百六十石と志すふに應永元年に  
焼亡すり天文二十年秋三好長慶放火よふを  
四度より乃ふ塔頭普光院の竹林より定守の郷の墓  
所と此定守家ハ此古墳を以て感よりおのりし  
さしを建仁寺より大法さるる所はる所冷は社

世中人千心もた智三十一

三国語林曰楊脩字德為丞相曹操主簿至江南  
詭曹義婢昔有八字黃絹初婦外孫壘曰探  
不解問脩曰卿知否脩曰知之探曰且勿言待  
朕思之行三十里乃得之今脩解脩曰黃絹  
色絲色絲絶字初婦少女少女妙字外孫  
女子女子好字壘曰受辛受辛辨字操曰  
一如朕意 俗云智無智技三十里云々

其智二十里も此古事をさるもれさるも句の意  
も彼眞室老人吉野より何の若もまなく見と  
といひ捨る古今此名句を始るまじたるも禮記  
吉野より句さるも乃二十里ハ家範の女里より



瑞臨は子らさくふ心盛山と日あり此朝顔  
此一白と坊玉とさしも貞室を楊脩の智と  
比一曹探の三十里此無智を花もそ智と  
手時祖孫は身をとおく一ひる乃酒為る  
を無あつとく絶妙好平の意ふ今ふ言さる  
か那妙するも花好花さる山も日氏の句は  
向ひとけ一先く名吟さる事平をあふくし  
春雨竹窓よおとら水いと果さる日客あり  
賓主坐さしとくさく云て云

梅咲かちやうふうふう思本喜

百ハル 九十二

此翁の句を念ふらうや平と此句言さるる  
も花とあつとく一と又ささるるも句は思を  
知らる人よもあつとく鼻をささるるをぬ  
引ち久く之実あり平よ云て云俗説平翁は  
御説よあつとく此是位のそをささるて平と  
ちやうふうふうふうとちやうふうと云  
幾さうとちやうふうふういひずけも此  
なすけも花といひあよおたし一詞もく佐松よ  
ても不改よもあつとく詞もあつとく  
思案あつとく不宣なるも佐渡玉も順徳帝  
をけ一先なり為兼はたした迂あつとく八  
歳大系此詞今よ跡はさると思くしと梅咲

て其の長閑やうなるにつけく是亦未考也  
さしけかちさるるを古言を立入たる物に社  
佐州らも古の詩に多し其もそのこと  
すて京汰より少くもあつたに  
高きの際方くの余光也へ  
さるかの織物傳授の人くのめり思  
めすんやまふ

残考伊賀の山中ウニのりの中紀ウニ  
よてウニ屋云又木ウニ竹ウニ石ウニ等此  
粒粒あり本名石炭云に佐佐長にケ  
あつて吳名さるく予う万物吳名鑑と妻  
也すん合すへ

我年也概へつけてや若蛭子  
愚考俗に我愚い事ハ概へ上て登て人の  
愚い事斗ふの初をへち入るり是皆  
古調のくせなり

年や人よさるていつも若蛭子  
あちこちや面くさるるさ柳 蛭友  
愚考古調なり西風東風と書なるへあち  
こちより吹風は柳の葉のさわく成へ  
古川よこひて廿廿をさる 柳 式  
勢いなる氷きえてさ流つ奥  
流よも二夕別くはさるりるれり是

非なる

箸の先は花咲せりり横海苔

矢檣帰帆

夕霞赤石の浦も帆のおもて

去年ハちやそこすすれよち節月

愚考ち節ハ正月ガれハ去年ハちやそれと

以勺一ハ二節月と出せるも非なる

姨石は啼くそ〜〜〜雑子式

愚考姨捨山は姨石娘石にて二石あり夫を

姨ひこり泣とよふ自勺のうら〜

蛇多のうらつさ立や花の雪

蛙子も目すり鈴を啼きよ

愚考目すり鈴とハ蛙を列立て鈴は調〜

くらと嘍咄喰も習〜あるもの〜親の鈴は

び〜心事をと〜〜〜〜〜〜〜〜

舟あ〜もやすむ時あり淡の施

姥横笑や老後のあ〜いお

愚考あ〜い〜〜〜〜〜〜〜〜

ある〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

君え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

漕出〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

皆かくの〜〜〜〜〜〜〜〜〜

是〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

京々九万九千張集の花尾式

地よ多し根より花の別れ式  
うち山や弁換急ぐすうの花装束

三井晩詩

盃よつしあはれがざりー花の種  
愚考連句よ盃を月よ用ゆる法あり既に  
翁婿持して一あの中よ前鑑書くー窓の月  
是盃ざりすれハ酒盃ハ片われハがーとの  
洒落ことと見えたり

てさちやくよきてふ来るや花見酒

画讚

裾山や虫をく徑の夕鄭福

連加山峰よりかろ漏脱の句

深川よ松をかそむ子代の美

山峯云深川よ松をかそむと子代乃  
さめを難中ふいひおこすよを謙よ  
意味の中庸なりむむ或くの柄傳よ  
ー寛永の洪水よ勿体なくも

將軍家御馬を進めさせし今此屋敷橋  
の邊より御覽あるふ洪水漸くして  
長天をひきし只 御目ふさくさるよの  
てをよ母寺に押深川よ本の松のみ  
よ本松とて所謂剗崎の弁天に松窓の  
の松を屋敷の松松よ稲荷乃松影は妙見

の松が有りは布を只一面の水を有りと云ふ  
愚考も多々是れ松と云ふはくしめ何と云ふ小  
今の八幡宮を寛文年中の近宮と云え八幡  
といふを砂村とありて今も猶その古跡を  
跡取りは必え八幡の松成るべきやと考う  
三有云ふ本松といふ所を釜屋堀より西の方  
深川大橋様江丁小名木川の崖畔に在り  
久世侯の下屋敷に内ふありて塚の上と云ふ  
おさる枝六七石身本の太サ三抱程と云ふ  
て不巧注連を張てあるその注連を張る  
由縁をこの小名木川寛永の頃小名木川  
節 所城の御所敷のうちよりは松を

御覧がまは川節は松を多くあれと云  
是れ松を本との松と作りられらるをト云ふ  
少つては御の字をつけて御本松と云ふ  
たりしと云ふは是れ松を押しつりてい  
五本松といふは中傳の云ふ  
愚考も元禄六年祖爺此白五本松といふ  
本を記して川上と云ふ川下や月友とあり  
さすれを寛永より元禄まで六十年も  
おのくを子に傳へ本松と云ふは  
と云ふは又此の深川は松をかそむとあれ  
に本と云ふ一本を本と云ふは松の古  
本と云ふはあはれといふは古松の

對して白作りしるるを極なり程可考  
 万葉のひとり梅白や為月夜  
 をと意此出合か一にや系の梅  
 旅人の病てうらゝ病む程梅山  
 柳名小さうそよや梅乃都人  
 愚考梅の都人とも難波の隈一詞  
 してかの小万柳有と名よけふと  
 帰来するも意流は苦白く柳か  
 矢剌埃  
 古川は鯉も目を張る柳くは  
 白英やるるよささくは消ぬへ

麻福田の禱よそりや去筆  
 愚考柳亭不持万治年中作者志し  
 百負息五二十評

葛かりその此嘆氣まてなる意風  
 今くよまよおよひ候る 麻福太  
 立圖 重頼 梅盛 季吟 宗隆 元隣  
 任 玄札 空存 道寸 珍也 長治  
 竹大 淵及 右十比評 無息  
 西武 知光の事 貞室 麻福志 夢え 赤中  
 今使 無息 西武 麻福志 夢え 赤中

未得

蘇福太不器

正友

下五字トヨミ

○消島も能うぬろと書あけて云く  
か、附てありて京大坂に戸伏尼の懸く  
も知れぬ蘇福太追考

春風よ吹おし笑おむもこの春

初瀬よそ人くふん

ひるや

くかれらる人やおのせれ山橋  
山峯云をけくかれとそ右奇を成し

吹風よ尾細うなるや大橋

愚考大橋一名奈天一名上膳といふ  
俊頼朝長山うけは渡さるる大橋

追をやうこれてひく人もなり一象信渡よ

ておれ陰くおま

なくある城をそそ

よやうくといふ

その儘云と

大北尾よ

ことしての

ひひうけこ

されえ木の

橋のむ乃

笑る歌うら

細よて大の







是武のついでをわすれざるそと別一巻ふかく  
て彼ら異抄を記しついで見るお下の下に巻ふ  
むう一六和國に猛者ありたりおまは山をつま  
いけをありていさきまていさきまていさきま  
門ありの姫の子ありたるはつらつらのまめくた丸  
といひるありたり池のわたりよつらつて芥を  
つららるあひの猛者のつらつらひめまておとあそ  
ひら多て居ておのころいおひけあまてつらつて居  
まひおめてその事とつらつらつらつらつらつらつ  
つらつてゆくをあまつらつらつらつらつらつらつ  
よつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
まう子の志あむする事とつらつらつらつらつらつ

も又福小野ぬその時うの家は女房はをうま  
はやどりよきちい色るよぬつらつらつらつらつ  
るを居てあやつらつらつらつらつらつらつらつ  
せるやまひよあつらつらつらつらつらつらつらつ  
ひあけくよまうて親子志あむとすることいふ  
女房わつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
まうりてやすたつらつらつらつらつらつらつらつ  
いひら色ハヨつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
ておきておつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
娘君のいひやう思ひておつらつらつらつらつらつ  
かつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
おろつらつらつらつらつらつらつらつらつらつらつ  
我父母死

あむことちうーを後ハ何事ーもたせし  
置まふりーあーむと後ー学問すへー  
まうハ学問ーてあえあふりやとホヤのハ  
まーいりく思ひてかよむよとらうりえさ  
法師よ成へーすれりちありぬ又いとくその  
その正とあさふ法師のちうけむあやー心  
殊大般若著あしとをむ屋ー心のりせさするや  
おもてあさむとをよ志こひてよと月又いとく  
あ月いこらう修りさよ獲身あとするやう  
てちうけくーとくを修りおいてハ娘君  
ありれとてぬちのたう後をてとーてとく  
かたう後をハとけうぬひつ是をまて修り

ーあうーむと不娘あくれよ及是ハそのじ  
まきとて道んをとおーてひとく中核一本を  
うひてとらと死ひーとてうせぬ身子と  
後の事ーより基菩薩を導師は信ー  
礼盤子のけりていとくまふた丸うあちをう  
それそぬひーかたう後といひてうちて  
あとーまといひてありぬ身子あやー  
てとひられハ亡者智光まかあう守世生す  
へき極ありーのまうらとる不世万子貪  
若ーて悪道ふゆらむとをーハ日の方後  
かくらあーらく心まこととあむありの  
娘君ハ行基の化身行基を文殊とまわす



おとせをば戸方角の法師が

はる或人而持の掛あつて画契の句と

愚業中一喜修未成の上てるまををうちうく

りもあふせ成とあるへきてよまをこめ何ある

へきと覚業かすへ又云家房とあれをとて

一涯よあどありよるやうれ延室天和の以

月名三人あつた若者名あつと云城守とよ又くさう

唐詩の松と流より人の句

下総の秋賜といふ門人か或人の後子浮香相院

の所製よへかすたの松のみさうもあつてをさう

つて書のあるあけあのは書の傍よるれもやとあつる

作つてあつたれをさうとあつ

氏よりしきまもよや花の概

愚考氏を御掬あましくけてあつていしきま

れやうと波九十九丁目慰勸るあて別く花の花

とよゆき必しも端書者つてさうなり田あ

送めなるといふていりよも安えす

田あまよ来て概さうする花のむ

糸まの片系なる休あま今を

さうりと笑てあ花よ昔後をわすれ

志まうと休らあおろあ備この

句くを折なりめ予もつては

云のちよをを添て

低う来る茶店も花の花の縁

瀬田夕照

近き日よかきうぬ細のたり社  
けふ祓とあひこなきうぬあかし  
けふ彼此岸菩提の枝を菊日式  
花の顔よりなうてしてや総月  
やうつ花や花三節の山  
愚考者三節ハ尺八の名人宜井やり世々  
ててをさくをすち柳四十八丁目の花の  
言の吟ハかたり節の名人やれハその  
尺八の名人よむのちる是も花梅の曲の傍に

ハル百四

陽とてハ守る候りて松の心

月よりこむをろれくのうす星  
そよふ片舟さそむすく免畏  
露の早も花梅あつてらるる花の雪  
伸かゝる入日もゆるるをさしつ家  
ひとあひ一紙おあつ

又よまきやうきしる梅あつての心

あひらちやうとく一のまも露の心

縁更のすまひ何なり事やえさし  
ぬと一つのおむりてやうりよる下









自画賛

命あまたの境もくもりたり  
けりき成るる諧活よ出づれば  
笑ふも下あふりて画賛の常  
くし全作  
何れの画もて書きて人を  
知るべし

梅々香よ遠もてさるる  
茶の垣

八  
百  
八

